

関東大震災はいかに回想されたか (五)

——自伝に描かれた関東大震災——

柴 口 順 一

(帯広畜産大学人間科学研究部門)

二〇二〇年四月二十三日受付

二〇二〇年七月二十二日受理

How was the Great Kanto Earthquake recollected? (5):
The Great Kanto Earthquake described in an autobiography
Junichi SHIBAGUCHI

はじめに

前稿では、東京の西部に位置する八区と、中心部の新宿区の証言を見てきた。本稿では、引き続き中心部の文京区と千代田区における記述を見ていくことにする。現行の二十三区の区分、名称にしたがうことはこれまでと同様である。町名も同じである。

なお、前稿までの目次を記しておく。

(一)

1 ヨーロッパ

ドイツ——ベルリン・ハイデルベルク

フランス——パリ

2

イギリス——ロンドン・オックスフォード
スイス——リュツェリコン

海外——アメリカ

アメリカ——ニューヨーク・シカゴ・ポコノ

メキシコ——メキシコシティ

3 海外——アジア

ロシア——ウラジオストク・ユジノサハリンスク

韓国——釜山・ソウル

台湾——台北・基隆

中国——錦州・上海

シンガポール

4 海上

(一)

九州

熊本県——熊本市

大分県——大分市

福岡県——北九州市

鹿児島県——鹿児島市

中国・四国

山口県

広島県——広島市・呉市

岡山県——岡山市

愛媛県——宇和島市

近畿

兵庫県——神戸市

大阪府——大阪市・豊中市

京都府——京都市・宮津市

滋賀県——彦根市

奈良県——奈良市

和歌山県——新宮市

三重県——伊勢市

中部

愛知県——名古屋

静岡県——静岡市

長野県——軽井沢町・松本市

富山県——高岡市

東北・北海道

福島県——福島市・会津若松市

宮城県——仙台市

山形県——米沢市・鶴岡市

(二)

秋田県——秋田市

北海道——札幌市

(三)

群馬県——高崎市・渋川市

栃木県——宇都宮市・那須烏山市

千葉県——市川市・千葉市・九十九里町・山武市・南房総市

埼玉県——さいたま市・川越市・所沢市

神奈川県——箱根町・小田原市・大磯町・鎌倉市・横須賀市・横浜市

(四)

東京——西部

大田区——大森北・(大森)

品川区——北品川・上大崎・(豊町・二葉)

世田谷区——新町・世田谷・三軒茶屋・下馬・三宿

杉並区——堀ノ内

中野区——中央・東中野

渋谷区——広尾・円山町・神泉町・松濤・代々木・千駄ヶ谷

豊島区——雑司が谷・池袋・(巢鴨)

北区——滝野川・田端

東京——中心部 I

新宿区——須賀町・大京町・新宿・西新宿・北新宿・大久保・富久町・

余丁町・原町・市谷本村町・市谷砂土原町・北町・神楽坂・

赤城元町・早稲田南町・早稲田鶴巻町・高田馬場

13 東京——中心部 II

文京区

土方梅子(注1)は千石の自宅にいた。土方は、若くして土方与志と結婚しす

でに長男をもうけていた。その息子を連れてフランスへ旅発つ予定であったという。夫の与志は前年、すでにヨーロッパへと旅立ち、演劇を勉強するためにドイツのベルリンに滞在していた。にもかかわらずなぜフランスへ行こうとしたのかははっきりと記されていない。ただ、以前から一家でフランスに行くことを計画していたようである。これまた、なぜフランスなのかは記されていない。船の切符も入手し、すべての準備を終えて九月十日の乗船を待つばかりであったという。もちろん、大震災によって渡航は中止となった。「ふるえ上がるようなこわさでした。」とだけあり、地震発生時のことは具体的に記されていない。その後、「家の中にいては、何時またゆりかえしが起って家が倒れるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っておりました。」と記している。夕方になりあちこちで火の手が上るなか、姑の実家や叔母の嫁ぎ先の人々が自分たちの家を頼って逃げて来た。また、近所の人々も庭の広いわが家に避難して来た。「この時は百人以上もの人たちが埋まりました。」というのだから驚きである。土方は、一家の主婦として百人分の炊き出しをしなければならなかった。「大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずの用意もしなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しに出かけました。」と記されている。だが、道中、土方は焼け出された人たちから罵声を浴びる。「馬鹿野郎!」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオ!」着物着て、すましてやがる、非常時だぞ!」といった非難であった。土方はそれにもめげず買い出しを続け、炊き出しの仕事を全うした。だが、「あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。」と述べていた。

地震と火災が一応は収まると間もなく、今度は暴動が起こるといふ噂が立った。「大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。」と記しているが、続けて「しかしこれは結局デマで、実際に殺されたのは、労働者や朝鮮人、社会主義者でした。」と記されている。平沢計七が殺害されたことについても触れ、「与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。」とい

い、「与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍のテロルに奪われたことは与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。」と述べている。

ベルリンにいた夫の与志のことについてもやや詳しく記されているので見ておきたい。土方与志にも『なすのよばなし』（河童書房 一九四七）という自伝があるが、震災についてはごく簡単な記述しかない。ソビエト政府の特別なはからいによってシベリア経由で帰国したことが記されているだけである。本稿第一回の1では、海外において震災を知ったケースを見たが、その補遺という意味でここに記しておきたい。見た範囲では、当時ベルリンには七名もの人がいたが、土方を加えると八人になる。

「与志はベルリンで、大震災のニュースを知らせるドイツの新聞をみたのですが、当時は、通信が発達しておりませんから事実よりも大げさな記事で、富士山も吹き飛んだと報じていたそうです。」と記している。そのうちに、こちらから送った電報や手紙によって状況を知り、「家族も無事と聞いて本当に安心したと言っておりました。」と記されている。やがて日本の新聞も入手でき、詳しい状況を知ると土方は帰国を決意する。

帰国を決意した彼は、どんな方法で帰ろうかと迷っていましたが、ベルリンのソビエト連邦大使館が、ヨーロッパ在住の日本人で、地震のため急いで帰国したい者は、団体を作れば、まだ外交関係の成立していない国ではあるが、特にソビエト連邦の通過を認めると発表しました。

与志は、これにとびつきました。彼は、早く帰国して新しい演劇を生み出したいと、はやる心をもっていたことが参加の一大原因ではありましたが、さらに、新しい国を見たい気持、かねてから関心をもっていたソビエト連邦の演劇にふれたい気持が重なって、荷物が掠奪されるとか、モスクワに抑留されるとかのデマにもまげず、この団体に参加したのです。

シベリア鉄道への乗りつぎのため、モスクワへ一週間滞在する日程は、彼にとってこの上ないチャンスでした。

シベリア經由の帰国については、ベルリンにいた七人のうち三人が言及していたが、実際に帰国した者はいなかった。帰国したのは土方ただ一人である。「革命後でもないシベリヤ大陸を東に向う汽車は、鐙戸をおろすことを命ぜられ、窓外に目を向けることは禁じられ」たが、それから中国、朝鮮を経て、その年の年末に神戸に着いた。迎えに行つた梅子はその時、「見たこともないものものしい与志の服装」に驚いたという。「ドイツの労働者がかぶる頭のふくらみの大きいハンティングのようないわゆるアルバイター・ミュツツェをかぶり、ズボンも膝下までの丈で裾にギヤザーをよせたニッカーボッカー、それに長いソックスを二枚重ねてはき、毛皮のへちま衿がついたチェックのホームスパンのオーバーをおつておりました。」と記されている。

徳川幹子(注2)も同じく千石の自宅にいた。徳川もまた、若くして徳川宗敬と結婚していた。宗敬は、水戸徳川家十二代当主篤敬の二男である。「朝方から雨まじりの強い風が吹いていて、それが十時ごろにやんだ」と、その日の天候が記される。続けて、「お昼近くになって、突然、グラグラと揺れだしたんです。」と記されている。幸い、家は壁がはげ落ちたくらいで済んだが、鎌倉の別荘にいた母親が亡くなったという。「鎌倉の別荘は二階家でした。家全体はつぶれなかったのですが、二階の床だけが抜けて、下まで落ち、そして母は圧死したということでした。」と記されている。また、「のちに父や妹にきいた話」として、「そのとき実父は二階にいました。母はていねいに顔を洗って着物を着がえるためにお風呂場にいたそうです。グラグラ揺れだして転んだのは、父のところへ戻ろうと思つて座敷へ入ったときです。母のうしろから、ひとり若い人がついてきましたけど、この人は座敷に入る前に転んじやつて命拾いをしました。」と記している。それから何日かたつて、ようやく鎌倉の一家が帰つて来た。「交通機関がズタズタ」で、「死者が出たからといって、すぐにつれて帰つてくること」ができなかったからである。徳川は、夫と一緒に実家に向かった。「瓦礫の山が道路にうず高く積みまわっていて、そのあいだを人力で縫うように走りました。あつちはつぶれ、こつちはつぶれていて、それはもうひどいありさまでした。」と記している。

だが、葬式は出すことが出来なかったという。「ものは動かないし、とてもお葬式なんて出せるような状況ではなかったのです。」と記されている。「これはどこ様もみんなそうだったようです。」と付け加えられている。

仁田勇(注3)は本駒込にある理化学研究所にいた。この年東京帝国大学を卒業した仁田は、理化学研究所の研究員になっていた。「九月一日、その朝は風雨がげしかった。」とその日の天候が記される。「ズブぬれになって研究室について」仁田は、九月になって気分も新たに頑張ろうと、図書室の閲覧室に入り文献を読んでいたという。

正午近く、机に向かつて坐っていた私は、急に下からドスンときき上げられる。瞬間、私は生まれてはじめてのもっとも大きい地震がきたなと直感して、椅子から立ち上がると、今度は大きな振幅で水平にゆれはじめた。立ち上がったものの、自分で立つてはいることはできなくて、机にしっかりとしがみついていた。読書機の所から廊下に出ようと思つても、その間に立ちならぶ書架からおびたしい本がなだれ落ちてきて通れない。第一震がすこし弱まったと思ふや否や、図書室をとり出し、混乱の化学実験室を横目でにらんで、隣の三号館、私たちの実験室にとびこんだ。

そこでは大型の蓄電池がたくさん床に投げ出され、硫酸が床一面に流れ出していた。また、実験用に集められた「老若男女の人間の眼球」が標本瓶の中から転げ出していったという。仁田らは、大切な測定機器を硫酸から守るため実験室から廊下に運び出した。ひと段落すると母親のことが気になり、自転車を借りて家に帰った。家は相当な損害を受けていたが、崩壊は免れていた。幸い母親も無事だったので、再び理化学研究所に戻った。しばらくたつて屋上に上がつてみた。そこからの景色は、「本郷の東大の方まで見通せ、東大に火事が起こっているのが見える。そしてその他、数ヶ所からも火事の煙が立ちのぼっている。」と記されている。やがて、「この地震で伊豆の大島が海中に埋没したとか、伊豆半島の半分がどこかへ行ってしまったとかいう風説が飛んだ。」という。だが、「これらはす

ぐに真実ではないことが判った。」と記されている。また、「いわゆる朝鮮人騒ぎ」についても記している。「九月二日頃になると、多くの朝鮮人が多摩川を越えて東京に侵入し、日本人に危害を加えるという流言が、大震災に打ちのめされた東京人の間にパツと広まり、人々は自衛の夜警団を組織して、極度に不安な状態が発現した」。

最後に父親のことについて触れておきたい。父親の仁田直はその時日本にはいなかった。第二回汎太平洋学術会議に出席するために、オーストラリアに滞在していたという。メルボルンかシドニーかははっきりとしないが、そこで父親は震災の報に接した。「東京の大震災の報はたちまちその日の夕刊に報ぜられて、大東京は全滅したかのような記事が出たそうである。」と記されている。土方与志の場合と同様、海外において震災に接したケースとしてここで補足しておく。だが、もう一つ注目すべき記述がある。それは、「皆大いに心配したが、幸い汎太平洋学術会議日本代表団の中に、地震学の泰斗、大森房吉先生が居られたので、先生の意見を求めたところ、「地震で倒壊する家屋は、そう数多くはないであろうが、その後起こる火事が恐い」といわれたそうである。事実そうであったから、さすが専門家の知識はえらいものとして感心した。」という記述である。「その後起こる火事が恐い」という大森房吉の言は、確かに専門家ならではの指摘だったとはいえるであろう。だが、「地震で倒壊する家屋は、そう数多くはないであろう」という発言は、「事実そうであった」とはいい難い。多くの人が火事で亡くなったことは間違いないが、倒壊した家屋もまた決して少なかったわけではなく、またそれによる死者も少なくはなかったのである。大森は東京帝国大学教授で、当時地震学の権威とされていた。地震後すぐに帰国するが、間もなく病で亡くなっている。

安倍能成（注4）は小日向の自宅にいた。法政大学教授であった安倍は、長野へ旅に出かけ、八月三十一日に東京に戻った。「その為に翌日家族と共に、関東大震災に遇ふことができた。」と、自嘲とも安堵ともとれるいい方をしている。「地震は正午頃であったが、ガタガタと音がしたと思ふと、庭の向ふの細道の側の家が白くはげて瓦を落として居た。やがて座敷の床の間の壁が傾いて来た。」と記し、

続けて「落ち着いてから又二三度ゆれたかと思ふ。」と記している。急いで罐詰や食料を買いに出かけたが、商売人の方は売り惜しみをしたという。やがて火事が起り、「白い雲の幕が四方に立ちこめて来た」が、「幸いに近所には火事がなかった」。夜になると「いはゆる朝鮮人騒ぎが起り、井戸に毒を蒔くから注意しろといふ声が、どことなしにきこえた」。また、「夜の十二時になると又大きなゆり返しがあるから、その時には前もって大砲を打つ」という警告もあったという。「こんなことが真しやかに伝へられて怪まなかつたのだから、こちらもどうかして居たのであらう。」と当時をふり返っている。

長谷川仁（注5）は小石川の自宅にいた。明治学院の学生であった長谷川は、夏休みの間信州で木材伐採のアルバイトをしていた。土木工事の請負業をしていた兄の手伝いであった。夏休みも終わり、夜汽車に乗って東京に帰って来たのが九月一日の朝九時頃であったという。「ほとんど寝ずにきた夜汽車の疲れが出て、私は軽い朝食を四十日ぶりのお茶漬けですませてから、奥の六畳の自分の部屋で眠りこけていた。そのときグラグラグラツときた。あまりに揺れ方がひどいので、私はとつさに勉強用のテーブルの下にもぐり込んだ。」と記している。父親や母親、弟や妹はみな庭の方に出ていた。「出てこい、早く！ 家がつぶれるぞ」とさかんに呼ぶ声があったので、「揺れが鎮まったのをみてテーブルの下からはい出し、立ち上がる」としたが、「またグラグラグラツ」ときた。「揺れがきたら、立ち上がるなどとうていできない。表にとび出すまで、二度、三度と、この揺れに襲われた。」と記されている。だが、何とか逃げ出し庭に避難することができた。「いつまた大きな揺れがくるかわからぬので、家の中にはこわくて入っていられたなかった」ので、「庭に雨戸を並べてその上にござを敷き、そこへふとんを持ち出した。」という。夕方近くなっても妹が帰って来ないので、様子を見に神社の境内の方へ行ってみると、そこから「春日町の砲兵工廠一帯が真っ赤に燃え上がっているのはつきりと望めた」。続けて、「歩いている足がガクガクすくみそうになるのをこらえながら春日町の角まで行ってみたところ、道ばたに死体がごろごろ横たわっていて、もはや足だけではなく、体じゅうがすくんで歩けなくなった」と記されている。「その晩は、ひどく暑く、庭の雨戸の上に敷いたござの上で過

「ごした。」という。

翌朝、長谷川は知り合いのいる京橋に向かった。「そこにたどり着くまでのいたるところが焼け焦げていた」が、知り合いの家は無事であった。話を聞くと、娘さんとその子供たちが大磯まで避暑に出かけたが、湘南地方は「全域が津波で崩壊して、見渡す限り砂浜になってしまったらしい」というのである。心配する奥さんから、婿と一緒に大磯まで行ってほしいと頼まれた長谷川は即座に引き受ける。「これまで受けたご恩のいくらかでもお返しできるならと考えた」からである。しかし、汽車や電車は全てストップしていたので、歩いて行くほかはない。海岸沿いは通行できないということだったので、甲州街道を歩き八王子に出た。その晩はその小学校に泊まり、翌朝早く厚木を通って大磯までたどり着いた。だが、何のことはなかった。「大磯の緑の山も、丘も、街並みも健在」で、娘さんも子供たちもさぶる元気だった。無事と分かれればすぐに知らせる必要がある。婿さんは一両日大磯に泊まっていたので、一人引き返してその晩はまた八王子に泊まり、翌日の昼過ぎに京橋に戻ったという。だが、戻ってみると驚いた。「前々日、そこを出発したときにはたしかに焼けてしまった大根河岸一帯が、跡かたもないのである。本所、深川は震災直後に焼けてしまったのだが、京橋あたりは遅れて火が回ったらしい。」と記している。焼け跡には貼り札が出ていて、避難先の住所が記されていた。

長谷川はまた歩き出し、神田、深川、本所を通って目的の小岩にたどり着く。「途中は見渡す限り焼け野原で、死体がいたるところにころがっている。本所、深川の掘割りは、どこもここも死体で埋まっていた。舟が浮かんでいても、その舟まですぐ黒に焼け焦げていて、そこにも死人が一面に折り重なっていた。水に浮いている遺体は、男はおしなべてうつぶせで、女はいい合わせたように仰向けだった。」とその時の様子を記し、「生きながらに私は地獄を見た。」と記している。奥さんはうれし泣きに泣きながら長谷川の顔を見て、「まあまあ、おぐしも伸びほうだいで、おひげも伸びほうだいで……」と笑って笑い出したという。信州の山の中の生活以来、四十日以上も床屋に行つてなかったというのだから無理もない。信州から帰ったその日に震災に遭ったことは、はじめに記したとおりである。

ちなみに、その時に奥さんは五十円をくれたという。大磯まで命がけで往復してくれたお礼だったことはいまでもない。「こういうときはお金が大事になるから」といつて渡してくれたといっている。

南部麒次郎（注6）は後楽にある陸軍科学研究所にいた。所長であった南部は所長室で執務中であつた。「急激な轟音、震動に思わずドアを押して廊下に飛び出した。早くも右方の廊下に火が流れ出るのが見えた。」と記している。南部は「火事だ。皆上に上つて来い。」と怒鳴った。「火の流れ出ている室内は床上一面火の海となり、室の一隅の戸棚に燃え移っている。忽ちの裡に火焰は壁に沿い、天井に向つて吹きつけて行つた」。職員が駆けつけて来たが、「かねて準備してあつた防火用具を使用しようとしたが、井戸のポンプやタンクに故障が生じたらしく水が」出なかった。そこで一策を案じ、「階上より階下に一列になれ。」と命令した。「バケツ、その他水の入る器をすべて動員して、階下より階上へ順次に水を渡して行つた」のである。「突嗟の機転が功を奏して漸く鎮火することが出来た。」と述べ、「今から思うと防空訓練の先鞭をつけたようなものである。」と誇らしげに述べている。

その後、南部は人を使わせ自宅に軍服の着がえを取りにやつた。消火活動のため「全身濡れ鼠」になっていたからであろう。着がえた南部はひとまず陸軍省へ報告に赴き、その足で砲兵工廠に行つた。「既に火は暮れていた。市内各所には火の手があたり夜空を赤く染めていた。神楽坂を過ぎる頃から、火気を帯びた生暖い風が吹きつけ、飯田橋にさしかかると烈風は益々強く、歩行も困難となつた。あたり一面は火の海であつた。」とその時の様子が記されている。砲兵工廠に行つたのは、南部が「精神を打ち込んだ」という小銃製造所があつたからであるが、そこはすでに「灰燼に帰っていた」。南部式と呼ばれる自動拳銃の発明者であることはつとに知られているが、この時すでに製造されていた。

広津和郎（注7）は本郷の下宿屋にいた。すでに作家としての生活を送っていた広津は、この年に出版社を設立していた。前夜遅くまで原稿を書いていたので、その日は正午近くになつてもまだ寝ていたという。

ひどい震動で眼がさめたが、ふと見ると、部屋の隅の鴨居の合せ目がばくばくと拡がっては又つぼまり、拡がっては又つぼまりしている。あれが拡がり切ったら、天井が落ちるのではないかと思ったので、私は寢床から起き上って、箆箭の側に行き、箆箭が倒れないようにと、それを押えながら、その蔭に身を寄せた。その途端に二方の壁がぱつと畳の上に崩れ落ちて来て、壁土の裏側の矢来見たようなものの中から、外光がすつと射し込んで来る。まるでキリギリスの籠見たような感じに部屋が見えて来た。

「これはえらいことだ」と思ったが、「階下に下りて潰れるよりも、三階で潰れた方が、まだ安全性がありはしないか」と考え、その場にとどまった。広津の部屋は三階にあつたのである。繰り返して来る揺れに耐え、やっと震動も間遠になつた頃、二階に下りて片岡鉄平の部屋のドアを開けた。片岡は蒲団をかぶつて寝ており、その側で出版社社員の岡村という人物がぼんやり坐つていた。ドアが開くことを知つた片岡は蒲団からとび起き、岡村と一緒に外に駆け出して行つたという。地震のため、先にはドアが開かなかつたらしい。広津は一階の洗面所に行き水道をひねつたが、洗面器半分ばかりで水がとまつてしまつた。だが、「とにかくそれで洗面して、歯をみがかなければならないと思つたので、洗面道具を取りに三階に引返し」といつている。地震によつて起こされまだ洗顔を終えていながつたとはいへ、ずいぶん暢気といわざるを得ない。三階からは辺りの様子が見渡された。「牛込見附近にある歯科医学校が燃えているのが見える。その外に、方々に火事が起つているらしく、空が煙で真黒になつてゐる。」と記されている。その時はじめて「これは大変な地震だ！」と実感したという。

それから広津は避難したのである。下宿屋近くの神社の境内に避難していた社員らと出会い、彼らを誘つて神楽坂通りに出た。広津は塩せんべいと罐詰とバナナを買い込み、社員のめいめいに持たせ見物に出かけたという。市谷の駅に着くと、広場に避難している人々の中に直木三十五を見つけた。直木と別れて四谷見附の手前まで行き、堤防に上り罐詰を開けて食べはじめたが、そこで軍服姿の東郷平八郎を目撃したという。そこからまた市谷に引き返す。「電車通を九段の方

に行く、右側は焼けていて、九段の境内に、畳を重ねて、それによりかかりながら、富士見町の芸妓たちが、その昼火事を途方にくれたようにぼんやり眺めていた。」と記されている。それから九段坂の上に立つた。「私達は思はず目を瞞つた。下町は見渡す限り全面の火で、火の中に三越あたりの建物が、真黒に浮んで見えた。」と記している。やがて坂の下から佐佐木茂索が、「時事新報」の写真班の人と登つて来たことも記されている。直木三十五、東郷平八郎、佐佐木茂索と随分いろいろな人と出くわしたものである。

ところで、広津ははじめ、震源地は江戸川流域だと思つてゐた。そう記された紙が電信柱に貼り出されているのを見たからである。だが、夜になつてから新たに「震源地相模灘」という紙が貼り出されたことを知り、急に鎌倉にゐる両親のことが心配になつた。そこで、社員と、下宿に遊びに来ていた青年と三人で夜の九時頃に鎌倉へ出発した。横浜駅付近は焼けているとのことだったので、保土ヶ谷の方へ行こうとしていた頃に夜が明けて来た。「横浜の大火の背後から昇つて来た真赤な太陽が、大きくて余りみごとであつたので、私達はしばらく立止つてそれを眺めていた。」と記されている。続けて、「何かその太陽の前で、大火事の威力が急に薄れたように見えた程であつた。」と記している。保土ヶ谷から戸塚の方へ超えて行く峠を過ぎた所で、上り列車がひっくり返つてゐるのを見た。「昨日の正午頃ひっくり返つたのに、そのままその辺にまだ腰かけてゐる」乗客がいたので、鎌倉の様子を尋ねた。「鎌倉は地震と火事と津浪で全滅ですよ」といつた答えが帰つてきたというが、乗客は地震発生の前に列車に乗つたはずなので、鎌倉の様子は分かるはずもないであろう。それはさておき、ようやく鎌倉に到着した頃には「もうすっかりくたびれ切つてゐた」といつているが、寝ずに歩き続けていたのだから無理もない。「八幡の蓮池に、沢山の大きな鯉が白い腹を上に向けて死んでいるのを見ると、その地震のすさまじさが想像され」と記されている。両親が住む家は「二階も階下もなく、唯古材木を乱雑に積み重ねたような恰好に、むざんにぐしゃりと倒潰してゐた」。これではみな下敷きになつたのではないかと胸がつぶれたが、間もなく父親の字で避難先を書いた木札を見つけた。避難先に行く、庭にテントが張られ、その中に両親がいた。「父は階下の座敷

で逃げおくれ、梁が頭に落ちて来たと思つたので、すばやく籐の寝椅子の側に突っ伏して助かったと云つていた」が、「脳天の髪の間、一寸血のにじんだ跡があった。」と記している。広津はその避難先の家にしばらく厄介になつた。

いつ頃のことかは記されていないが、「いわゆる鎌倉のインテリ連中が、警察に協力して、鎌倉復興に智慧をしようとういうことになつて」、会議をする事になつた。場所は停まつたままになつていた電車内であつたといつてゐるので、それほど後のことではないであろう。会議は毎日正午を過ぎると開かれた。広津は二、三度しか出席しなかつたが、そこには小泉三申、石橋湛山、姉崎正治をはじめ、高名な学者がいたという。

近藤憲二(注8)は本郷の自宅にいた。労働運動の活動家であつた近藤は、家で仕事をしてゐた。「すると正午ごろドカンと大きな地震である。棚の本がぐぐぐと崩れ落ちた。」と記されているが、その他の被害はなかつた模様である。部屋を片付け終わると、向丘の書店まで様子を見に行つた。「赤味を帯びた地震雲が南の空にモクモクと現われ、余震が幾度かきた」が、大したことはあるまいと思ひ家に帰つた。「遠くで火事が起こつた気配だったが、そのくらいのもあるだろうと、とくに気にはとめなかつた。」と、どこまでも樂觀視してゐた。夕方になり、友人とともに再び家を出た。「大手町にある内務省が焼けると痛快だ、行つてみようという弥次馬根性もあつた」と正直に記している。神田まで行くと一面火であつた。また、大手町辺りはとくに焼けてしまつたことも知つた。「うかつだつたが、家が露地の奥だつたので、火事といつてもそれほど思つてゐなかつたのである。」と今までの樂觀を反省している。だが、「本郷三丁目まで火がきてゐるというので駆けつけ、電車の屋根に登つて見ていた。」という。

翌朝早く、中央部の様子を見ようと家を出た。「通り合わせたトラックにぶらさがつて、銀座のアルスの焼けあとへと行き」、近くの公園で知人に遭遇した。アルスは出版社である。避難先が記されてゐたのでそこを訪ね、夜になつて本駒込の家に帰つた。活動のために仲間と借りた家があつた場所である。翌日は焼け出された友人の母子を迎えに九段へ向かつた。「途中でひろつた人力車をひいて」と記されているが、これは捨てられたか、あるいは置いてあつた人力車を文字通

り引いて行つたということであろう。母子の荷物を載せるためであるが、途中で四十余りの婦人に人力車夫に間違われたという。母子の荷物を積んで戻つて来ると、何よりも米の確保と思ひ行きつけの米屋に行つたといつてゐるが、母子には何ら記されていない。米屋は「戸をおろしてゐて、もうないという。糶にさわつたから」「じゃ、あとでタダでもらひに来るよ!」と捨てぜりふで帰つた。米屋は気味がわるかつたのか、すぐにこつそりと、とどけて来た。」と記されている。人力車を失敬したり、米屋を脅したりとなかなか大胆なことをする人物である。その翌日であつたか、徒歩で大杉栄の家に行つたという。大杉は「これで『日本脱出記』の原稿を催促されなくて助かつた」とのうのうとしてゐた。「たぶんそれが大杉たちと別れた最後であつたろうと思う。」と記されている。

古今亭志ん生(注9)も同じく本郷の自宅にいた。落語家五代目志ん生は、この時には金原亭馬きんと名のつてゐた。「朝から雨がパラパラと来るが、いやに暑つくるしい日でしたよ。パタツとその雨がやむてえと、こんどは風が出てきやがる。おてんとうさまと雨と風が、運動会かなんかやつてゐるようです。」とその日の天候を、いかにも落語家らしい口調で語つてゐる。「なんだい、おい、へんな天気だなア」などといひながら、「猿又さるまた一つで、座敷に寝ころがつて、雑誌なんか見とつたときであつた。「雨がピタツとやんだ途端、グラグラグラーツ!」「そのうちに、だんだんひどくなつて、裸電球が、天井にぶつかつて、パチーン!」と小気味よい口調で語られる。続けて、「かかアのほうをひよいと見てえと、奴さんやつこ、勝手口で、七厘で、メザシなんかやいていて、あわてて、そいつに水ウぶつかけてる。」と記されている。「お前さん、大丈夫かいッ!」といつてかけ寄つて来た時である。「タンスの上の、嫁入りのときもつて来た鏡台が、ガラガラガタタンでんで、あたしらの頭ア通り越して、目の前に落つこちて来た。」という。「やい、やい、オレたちア、兄弟(鏡台)なんぞじゃアねえ。夫婦だ、「ノンキに洒落なんぞいつてる場合じゃアないよ」と、まさに落語のようなかけ合いが記される。

だが、揺れは激しい。志ん生は表へ飛び出した。その時、「あたしの頭の中に、ツーツとひらめいたのは、まごまごしてゐると、東京じゅうの酒が、みんな地

面に吸い込まれちゃうんじゃないかという心配です。」と、本気なのか冗談なのかわからないような言葉が記されている。だが、いきなり「かかアの財布ウひったくって」駆け出し、近所の酒屋にとび込んだというのだから、本気だったのである。酒を売ってくれというのと、向こうも商いどころじゃなかったのだろう、「この際は、師匠、かまわねえから、もってってください」といった。「しめたってんで、あたしやア、そこところがっている四斗樽の栓をぬいて、一升までグイグイグイってあおりましたよ。」と記されている。だが、「そうしている間にも、棚から一升びんが落っこちて来て、あたしの足もとではぜたりする。「こんなもったいないことを、とても見のがすわけにはいかない」。志ん生は割れない瓶を二、三本抱いて表へ飛び出したという。外では、逃げる人や泣き叫んでいる子供で大変な騒ぎであった。「あたしもかけ出そうと思ったが、ちょうどいい心持ちに、酔いが回って来たから、足もとがうまくねえんですね。グラグラあたりが回っている。地面がゆれているのか、手前エがゆれているのかわからない。きつと両方でしょう。」と、またまた冗談のような記述がある。家は「いくらかかしいくらいで、焼けなかった。」という。

翌日、母親のことが心配になり高田馬場の実家に行った。家が傾き戸が開かなくなっていたが、みな無事であった。お金や米などをもらい自宅に帰って来ると、お客さんがたくさん来ていた。みな家を焼かれた人たちであった。師匠である先代の志ん生も転がり込んで来たという。「師匠のナリはてえと、刺子オ着て、まるで消防の頭でえいでたちで、家族七人に犬まで連れて、「おい、しばらく、頼まアな」って、スーッと入って来た。」と記されている。だが、問題は食べ物である。ふと思いついたのは、網に入れて二階の天井につるしておいた正月餅であった。だが、餅はポロポロでカビが生え、おまけに虫がいつぱいいた。それでもかまわずグラグラと煮て出したという。「師匠は「うめえ、うめえ、山海の珍味だよ」てんで、みんな食っちゃった。」と記されている。

いつのことは記されていないが、吉原へ様子を見に行つたことが記されている。弁天池でたくさんの方が焼け死んだことに触れ、「池ッたつて、小さな池で、おまけに下ア泥で、人の背よりいくらか深い。次から次へとび込むもんで、下

の人アおぼれる。上の人ア、火をかぶるってんで、一夜あけたら、六百三十人ばかりの人が、折り重なって死んでいたてえんですからひどいですよ。女郎なんかも、ずいぶんいたそうですよ。中にやア、あたしの馴染もいたかもしれませんが、みつかりつこありませんよ。」と記している。本所の被服廠跡のことにも触れ、「五代目の麗々亭柳橋てえ師匠も、あそこんどでなくなつた。ほかに古今亭志ん橋だの、奇術の帰天斎小正一なんでも、震災でいなくなつちました。」と記している。これまたいつ頃のことかは記されていないが、復興演芸会というものができ、焼け残った寄席を借りて興行した。「いやア来るわ来るわ。なにしろ、みんな演芸とか娯楽に飢えてるから、そういうところへ押しかけて来るんです。」と記されている。

翌大正十三年のことである。一月十五日に長女が生まれたが、その二日後、「明け方に、グラグラッてんで、またひどい地震が来ましたよ。」と記している。翌年一月に起きた強い地震については、これまで小林恒子や藤田佳世も記していた。小林は十五日といい、藤田は十三日といっていたが、志ん生によれば十七日となる。ただ、いずれも明け方あるいは未明であったといっているのが共通している。「その時分はてえと、のべつ地震が来たんですよ。」と志ん生が加えているように、いずれも間違いないのかも知れない。

森岩雄（注10）は本郷の水口薇陽の家に行った。水口は映画俳優の養成所を設立し、森はその「主事兼講師」となっていた。九月一日は水口の家で入学試験のあった日である。「朝早くからひどい雨が降っていた」という。面接試験は順調に進み、昼少し前に終わった。「それでは食事にしよう」と、先生と二人、食卓についてた。御馳走は近所の洋食屋から取り寄せた「ポーク・チョップ」であった。それに箸をつけたか、つけないかの瞬間に、大きな地震がやって来たのである。相当大きく揺れたが、なにしろ、水口邸は平屋で非常に広い家のでがっちり出来ているので、正直言って、大きな地震だとは思ったが、それほどのものでもない感じであった。」と記している。だが、水口邸を辞して外に出て見て驚いた。「直ぐ近くに見える三階建ての下宿屋の、屋根の瓦が全部無くなってしまっていた。本郷通りに出てみると帝大の構内から火事が出て炎が見えた。繃帯をした人が人力車に

乗って行くのも見えた。そこで、はじめてこれは大変な地震だったということがわかった。」と記されている。「その時ふと頭に浮かんだのは、下谷の岡茂登のことであった。」と森は記している。「岡茂登」とは、おそらく父親の出資で出したいわゆる待合茶屋である。急いでそこを訪ねたが、幸い何事もなく父親も無事であることがわかった。それから、雑司が谷にある実家に徒歩で向かった。「春日町かすがに出て砲兵工廠（今の後樂園）を左に見る坂を登る時は、砲兵工廠から火が出て、吹く風が熱くて、朝の雨で携えていたレインコートを頭から被つてもたまらない位であった。」と途次の様子が記されている。だが、「坂を登ると、町並はだいぶ静かになり、大塚近辺は何事もなかったような感じであった」。歩きながら、「これは喰べものに困ることになりはしないかと直感し、見つけた団子屋に入って持てるだけ団子を仕入れ」という。やつとの思いで雑司が谷の家にとどり着いたが、「この辺は全く平静で、わが家も二階の瓦が二、三枚落ちた程度で何事もなかった。「やれやれという思いで、皆で団子を喰べた。」と記されている。だが、夜になると「東京の空は赤く燃えて四方は炎につつまれていた」。

翌日になって、昨日は無事であった下谷の岡茂登も火事にあつたことがわかった。「父は岡茂登の小母、女中頭、それに年とつた芸者さんを一人連れて、息も絶えだえに雑司ヶ谷に避難して来た。」と記されている。「小母」とはたぶん料理屋の女主で、そこは父親のいわば妾宅でもあつたと思われる。「この一行を迎えた母の気持ちは、察するのに複雑なものがあつたろうと思われるが、私の母は立派であった。笑顔をもつて迎え入れ、甲斐がいしく世話をした。」と記されている。やがて焼跡に仮宅ができるとみな揃つて退散し、父親もそこから仕事場に通うようになったという。

いわゆる「朝鮮人騒ぎ」についても触れている。自警団が組織され、自分もそれにかり出されたという。妹から、「兄さんは朝鮮人によく似てるところがあるから、知らない所に行つては駄目ですよ。」と戒められたと記している。

佐佐木信綱（注11）は本郷の旧加賀藩前田家にいた。『校本万葉集』出版のため前田家の家従と打ち合わせを終え帰ろうとした時であった。「大地ゆらぎ、眼前に瓦落ち土塀の崩るるにあい、かろうじて大学の赤門の前に出た」と記されてい

る。そのまま西片の自宅に帰つたが、家は無事であつた。そこで大学の研究室へ行くこととしたが、「混雑を極めて近づくことも出来ず、研究室は火災に遭つ」ていた。この火事のために研究室においてあつた書類は全て焼失したという。だが、三日の午後になって、「校正刷全部を一しぱりにしたのをわが家で発見し、またある人の所にも「一くくり全部があることがわかつたので声をあげて喜んだ」と記されている。「もし此の校正刷が残存しなかつたならば、この事に従事した人々の多年の努力と苦心とは、全く灰燼に帰してしまふところであつた。」と加えられてゐる。なお、佐佐木の自伝はほぼ各年の編年体で記されている。また、各所に短歌が挿入されている点でも特徴的である。

三宅周太郎（注12）は本郷の菊富士ホテルに滞在していた。三宅は演劇評論家として活躍していた。揺れや被害については記されていないが、「ホテルの三階から下りてくる途中、二階の梯子段を下りそこねて右の足を捻挫した。」と記している。ホテルは一時休業することになったので、同宿の関西人とともに九月四日、痛む足を引きずりながら貨車で大阪の姉の家に引き上げたときだけ記されている。

14 東京——中心部Ⅲ

千代田区

吉岡弥生（注13）は飯田橋にある東京至誠病院にいた。もともとあつた病院を増築し、八月三十一日に引き取つたばかりであつたという。吉岡は医師で、病院の経営者でもあつた。地震発生時の具体的な記述はない。「最初の地震がきたとき、家は壊れませんでした。見回つてみると、台所のボイラーに続く鉄管が壊れて、どんどん水がこぼれていました。」と記されているだけである。吉岡はじめ、患者や従業員たちに「危ないから外へ出てはいけません」といつて止めていた。しかし、次第に火の手が近づき病院も危なくなつてきたので九段にある公園へ避難した。三十七人の入院患者と医局員、看護婦六十人の合わせて九十七人の一団の避難であつた。公園は大変な混雑で、やがてそこも危なくなつてきたので、

無事だとわかった東京女子医学専門学校へと向かった。同校は吉岡らが設立した学校である。医局員らが自動車を三台も調達して来てくれたので、患者を運ぶのにたいそう助かった。「われ先に争って避難する洪水のような群衆にもまれて、自動車が動けないほどでしたが、とにかく患者を一人残らず学校へ運び終ったときには、我ながら肩の重荷を下してほっといたしました。」と述べている。だが、学校の建物は無事だったというものの、壁土が落ちたり破損した箇所も少なくなかった。そこで、隣りにあった陸軍経理学校に頼み、その撃剣道場に患者を収容してもらおうことになった。「しかし、絶えず余震が続いておりますし、夜になると、昼間よりも大きな地震がくるといふ噂が立って、みんなが不安がりまでするので、全部校庭に出して、一晩中まんじりともしませんでした。」と記されている。だが、続けて「重症の患者がいなかったため、夜露にあたってもそのため別に病勢の悪化した人のなかったのは、不幸中の仕合せであったと思います。」と記している。ただ、若い看護婦が一人亡くなった。「病院でお産をしたばかりの母子に付き添っておりましたので、最初の激震に驚いてまず子供を抱いて表へ飛び出したところへ、突然向かいの徳川家の煉瓦塀が倒れてきたのですが、そういう咄嗟の間にも、抱いていた子供をかばったので、子供の方は助かり、自分は足に大怪我をしました。」と記している。いろいろと手当をしたが、翌日に亡くなってしまったという。

翌日になって、葉山に行っていた家族が急に気になりだした。たぶん別荘であろう、そこには子供と孫に加えてよそから預かっていた子供、それに母親と女中がいた。オートバイを持っている出入りの者に頼んで探しに行ってもらったが、途中の橋が落ちていたということで引き返して来た。「めったに人を叱ったことのない私でしたが、このときばかりは、「お前のような人間は、今後一切出入りをさせない」といって、ずいぶんはげしく叱りつけました。」といっているが、無茶なことをいったものである。それほどに動揺していたということなのかも知れない。学校の小使いが自転車に乗れるということなので、三日の朝、葉山に向かわせた。やきもきして待ったが、四日の夜になってやっと戻って来た。みな無事であったことに胸をなで下ろしたが、それならばなぜもっと早く帰って来ない

のお腹が立ったという。「使いに出した男は、その家で風呂に入れてもらったり、刺身で御飯をいただいたりして、ゆっくり一晩泊ってきた上に、その家の息子と一緒に帰りがけに自転車で東京市内の焼跡を見物していた」のであった。これでは吉岡ならずともお腹が立つのはもつともであろう。

患者を無事移しはしたものの、小児科の赤ん坊のミルクや従業員の食料、そして薬も足りなかったので看護婦を買い出しにやった。お米は出入りの米屋が玄米二十五俵を融通してくれたので、小使いに搦かされた。従業員も合わせて三百人あまりいたので、一人にお粥二杯ずつと決めてみんなに食券を渡したという。また、ふだんから出入りの商人が代わるがわるに見舞いがてらいろいろなものを届けてくれたので、副食物の方もみんなに行きわたったと述べている。「それをまたみんなが、お互いに譲り合って食べるというふうで、災禍のかげに美しい人情の花が、いたるところに咲いておりました。」と記している。

病院には夥しい怪我人や病人が押寄せて来た。「火事の煙を吸って肺炎を起こしたというような、絶対静養を必要とする患者が多いのに驚」いたと記されている。学校の病室の修繕を急ぎ、震災後復興したばかりの新聞に受け入れの広告も出したという。また、バラックでもよいから早く病院を復興したいと思い、内務大臣の後藤新平のところに行き、材木の調達をお願いしたともいつている。十一日には早速材木を集めにかかり、二百坪あまりのバラックを建てることできた。そのうちに、焼け残った病院が売りにだされていたのでそれも購入したというから、その実行力には舌を巻く。「よくもまあこんな冒険ができたものだ、と自分でも感心しております」と本人も述べている。十一月二十三日にあらたな病院が開院した。「近くにまだこれといった病院のなかったときではあり、たちまち病室が一杯になって動きがとれず、私の院長室のなかにまでベッドをならべるといふくらいの繁昌で、うれしい悲鳴をあげなくてはなりません。」と記されている。なお、吉岡の自伝には、焼ける前の東京至誠病院、震災後のバラック、そして新たに購入した病院の写真が掲載されていた。

村上一郎（注14）は飯田橋の自宅にいた。「家から持ち出せたのは、幼いわたしをくるむようにして、母がかかえ出した一枚の蒲団だけであった。」という記述が

あるだけで、地震発生時のことについては記されていない。それももつともなことで、村上はまだ二歳の幼児であった。しかし、「わたしはまだ満三歳に達していなかったが、異常の体験の故にであろうか、この間数日のことだけは、ありありと記憶している。」と述べている。二歳といっても九月二十四日生まれなので間もなく三歳になろうとしていたから、あり得ないことではないであろう。本稿における最も年少の記憶である。

村上一家は新築したばかりの家を焼失したので、父親の郷里、栃木県の大田原市へ避難することにしたようである。埼玉県の川口駅で列車に乗った。「当時のやぼったい東北線の三等車のしつこいニスの匂いに混って、人いきれや酸すえたものの匂いが鼻につき、超満員の列車はあえぐように、のろくさく走った。」と記されている。車内には様々な人がいたが、その中に「一羽のにわとりを抱いている男」がいた。その男は「チョーセンジンじゃありません」「チョーセンジンじゃありません」と繰り返していた。それを見ていた村上は、「一二三四……と両手の指を折りながら、一所懸命くりかえしていた。」という。「朝鮮人の人は、一二三四……と指で数えることができないので、もし朝鮮人と思われる自警団に捕まったら、そうしてみせればよいのだというデマが流布されていた」からだと言明している。前の席の男は「利口な子だ」といったとも記されていた。列車が宇都宮駅につくと、「フォームには肩から婦人会の襷をかけた小母さんたちが出ていて、まぶしいほど白い握り飯と茶湯を配ってくれた。」「そのおいしさを、わたしは長く忘れなかった。」と記している。宇都宮を出てさらに北に向かい矢板駅で降り、そこから「トテ馬車」で大田原へ向かった。御者が「トテテート」と、豆腐屋の持っているようなラップを吹き出発することに由来したもので、十人か十五人の乗客を乗せる乗合馬車であると説明されている。「その乗合馬車は、ゴトンゴトンと、万緑のなかの田舎道を、走りに走った。」と記されている。

ところで、列車に乗ったのは川口駅であったが、実はそれ以前のこととも記されていた。つまりは飯田橋の家を出、川口駅に至るあいだのことである。二歳の時の記憶とは少々考えづらく、またかなり粉飾されているとは思われるが、やはり記しておくべきであろう。

空は一面にだだ黄色く、風はなまぐさくもあり、きなくさくもあった。家という家の焼きつくされた跡の、道ともいえないぬ道を、人びとは背負える限りの物を背負い、エジプトを追われたエスラエルの難民のように、無気力にとぼと歩いていった。モーゼのような指導者は、彼らの列には欠けていた。代りに、要所要所に顎紐の警官と、劍附鉄砲の兵士と、腰に日本刀をぶち込んだり竹槍をたざさえた在郷軍人の指導する自警団が屯たむしていて、不審の者を誰た何かした。路はやがて荒川に達した。赤羽の鉄橋は落ちていた。工兵隊が架けた舟橋が、そこを渡る唯一の道であった。小さな舟を横に並べて、木の板をのせてあるだけのその橋は、一步踏み出すごとにカタカタと鳴りゆらいで不安をさそった。が、この橋を渡りさえすれば、もう安全の地なのだ、という、実のところは当てもならない気持ち、皆がもっていたように思える。一本の蜘蛛の糸にすがって、地獄の血の池からはい登ろうとする亡者のように――。

喜多六平太(注15)も同じく飯田橋の自宅にいた。能楽師十四世喜多六平太は、多くを語ってはいない。ただ、「宅には隠居(実父宇都谷鶴五郎)がゐまして、いきなりグラグラときた時も、ひどいゆり返しのある時も、なかに安政の地震よりは小さいよと言つて、どうしても立ち退かうとしません。そのうちに猛火はもう近辺へ迫ってくる、といふやうなわけで、やつと持ち出したものも、そこで燃えてしまふといふ惨めなことになりました。」と記されているだけである。家は丸焼けになり、舞台もまた丸焼けになってしまった。当然「装束も小道具も、何一つ残らず灰になつてしまった」が、「伝書(家に伝はる芸事関係の書き物)に次いで大切な面だけがまづまづ無事に運び出されたこと」は不幸中の幸いであつたと述べている。

小林勇(注16)は神田神保町にある岩波書店の卸部にいた。小林は岩波書店の店員であった。そこには仲間二人と、遊びに来ていた近所の子供三人がいたという。「激震の瞬間私たちは、前庭に飛び出した。凄惨な物音がし、家は動き壁土が落ちた。私は夢中で、隣家との間に立って倒れないように手をひろげていた。仲

間の一人は前の道に飛び出した時、向側の家が倒れたが、うまくその屋根の上へ飛びのつたので助かった。」と記されている。それから、仲間と一緒に書店の方へ向かった。「途中つづれた家の下敷きになった家族を大声で呼んでいる人、血だらけになっている人など一人として平安な者はいなかった。真夏の特に暑い日の真昼であったから裸でいた人もあった。どの人も土埃をかぶって真黒な顔をしている。」と記している。書店は倒れもせず、傾きもしていなかった。店員もみな無事で、前の電車通りに出ていた。「街は明るい強い陽の中がらんとして、変に静まり返っている。乗客もなく、乗務員も去ってしまった電車が広い道路にあった。」とその時の様子を記している。それから三十分ほどすると、方々から煙が上がった。「私たちはかたまってお濠ばたの方へ逃げ、それから多分つづれてはいないだろうと考えられた小日向水道町にある岩波茂雄の住宅へいった。」と記されている。「多分つづれてはいないだろう」というのはむろん希望的観測だったであろうが、その後何も記されていないところを見ると無事だったのであろう。ちなみに、その敷地内には、先に見た安倍能成が住む一軒もあったことが記されている。

翌日、大久保に住んでいた兄を訪ねたが無事であった。「朝鮮人騒ぎ」のために自警団が組織され、その日の夜から交代で夜警にあたったことも記されている。ところで、小林には、地震の「二、三日後書き始めて、約一ヶ月の震災体験を綴ったもの」が残されており、今回それを通覧し「目撃した事実を記してあるのは役にたった。」と述べていた。しかし、「ノートによって細かいことを写すのは容易であるが、それは避ける」と述べていた。だが、「朝鮮人騒ぎ」に関しては少ない引用がされている。兄を訪ねた帰りのことである。

帰途「牛込へ来た時、武装した青年団や在郷軍人たちがひどく騒いでいるので、何事かと思いきいて見ると、朝鮮人が放火したというのである。それから帰途は全部朝鮮人騒ぎで大変であった」とありノートにはその後この事についていろいろ考えたことを述べている。私はその噂を信ぜず、「彼らはそんなことはしないとと思う」、しかし「若し仮にそんな朝鮮人が少しくらい現れても

当然ではないか。日本人が日頃この人達を迫害圧迫している罪悪に較べれば彼らのお返しの方が小さい」と記した。また「愛国心・偏狭なる愛国心、それらは間違つたる群衆のために如何に悲惨なる結果を引出す事であろう。真理はただ一つである。万人を愛せ。これを本当に理解した者の前に、日本人も朝鮮人もあるものか」と書いている。

夜警の当番から解放された翌三日の朝、岩波茂雄から下町の方へ行ってみようかと誘われた。まずは神田へ行き、書店と卸部の跡を見た。「卸部の土蔵の跡にはたくさんのが、本の積まれたままの形で焼けて白い灰の塊になっていた。しかもそれは、ちぢんで小さな本の塊になっているのであった。」と記されている。続けて、「下町一帯は見渡す限り焼野原で、所々にビルや土蔵が残っていた。駿河台のニコライ堂が、さえぎるものもなくま近に見えた。」と記されている。神田橋を渡り歩いていると、「黒く焼けこげた死体」を見つけた。近づいて詳しく見たが、「死体は子供らしく小さくて、男か女かわからなかった。」という。日本橋近くでは「人が魚をあさっていた」。また、「或る所に丸ごと鮭が積まれていて、人が持ち去るのが見えた」。途中、二人は止まった電車の中で一休みし岩波の家に戻った。

その日の昼過ぎである。小林は店員の小山久二郎とともに鎌倉へ行くことを命じられた。二日の早朝、鎌倉に住む岩波の家族の安否を確かめるために出た店員の長田幹雄が、いまだ戻って来ないからである。ちなみに、小山はのちの小山書店店主、長田はのちに岩波書店の専務になったことが記されている。汽車は動いておらず自動車もない。昼食を済ませた二人は、草鞋を履き脚絆をつけて出発したという。あいにく雨が降り出し、「全くの焼野原の雨の中を草履ばきでびしょびしょ歩いて」行った。品川近くに来た時にはすでに夕方になっていたというから、随分時間を要したものである。品川駅からは汽車が出ると聞き行つて見ると、貨車だが幸い乗ることができた。汽車は六郷の手前で止まったので、そこからはまた歩きとなった。「もう夜になっていた。六郷の鉄橋をこわごわ渡った。レールは曲り、或る箇所はね上っていた。疲れ、空腹そして不安。私たちはどう

していいかわからぬが、とも角一刻も早く鎌倉へ着こうと思つて線路を歩いた。」と記されている。川崎を過ぎたあたりで一人の兵士と一緒になるが、やがて彼らは緊張した場面に遭遇する。

線路のわきの暗がりの中に白い着物の人間がねている。傍を通りぬけるのも無気味なので、皆立ち止った。兵隊は刀を抜き、小山と私は石を拾った。兵隊が誰だ、立てと大声でいったが、全く反応はない。線路から街へ出て歩くことにした。暗い街に提灯が見える。そこには刀、竹槍、鉄砲などを持った人間が屯していて、「こんばんわ」といわせたり、後頭部を撫でたりして通行人を一々調べている。その頃歩いている人は少なかつた。線路の人間のことをきくと「ああ、あれはもうやつつけてあるんです。二人いる筈ですよ。昨日やつたんです」と彼らは兵隊に平然と答えた。

二人が何とか無事だつたのは、「いつも兵隊が自分の友人だといつて」くれたからだといつていて。途中から同道した兵士が結果的に命を救ってくれたのである。そして、「この時の朝鮮人虐殺の恐るべき見聞は、若い私に実いろいろのことを考えさせる契機となつていて」と記していた。横浜方面には赤々と火事の火が見えた。もうこれ以上歩き続けることは無理と観念し、通りがかりの警察に飛びこんだ。「たき出しの握飯と沢庵づけがあつた。それを無断でしたたか食つた。」という。「戦場のような」警察では私たちに注意する者などいなくなつた」からである。三人は奥まつた所にあつた畳敷きの部屋を見つけ寝てしまつた。「朝になつて見ると廊下の向うは留置所で、朝鮮人がぎっしり入れられて立つていた。」と記されている。二人はここで兵士と別れる。

鎌倉へ向けた歩き出したが、草鞋が切れたので下駄を買つた。「鎌倉に近くと地震の被害は大きく、円覚寺附近の道には両側の家が倒れてふさがれている個所が多かつた。円覚、建長、八幡宮などつぶれた建物を見て通つた。」と記されている。やつとの思いで鎌倉に着くと、岩波の家族はみな無事であつた。長田幹彦は入れちがいに帰つたという。午後には、もう一つ岩波からいつかつて

いた小泉三申を見舞つた。帰りも徒歩と覚悟していたが、横須賀から軍艦が出て芝浦まで人を運ぶという噂が聞こえて来た。そこで、九月五日の朝早く、鎌倉駅近くの海軍臨時事務所へ行つた。確かに出るということだつたので、すぐに出発し三時間かけて横須賀の波止場へ着いた。「夕張」という戦艦であつたが、五百人しか乗れないということなので、若くて体力のある二人は遠慮したという。しかし、積み残された者はその後駆逐艦に乗せられ、夕方に芝浦に着くことができたといつていて。そこから歩いて岩波の家に戻つた時は夜の十時を過ぎていた。

六日、信州から心配して出て来た三番目の兄に会い、地震で落ちた屋根瓦を片づけたりした。「鎌倉行きの疲れなど残つていなかった。」というのだから、よほど強健であつたのであろう。七日、信州から来た兄と友人の三人で被服廠跡を見に出かけた。「大川端へ来て見ると、まだ岸の方には男女の見わけのつかぬ屍体がたくさん浮いていた。着物はなく、水ぶくれになつた人の皮膚が焦げているのがよくわかつた。」「被服廠跡に近づくとも異臭が一面に漂つていた。広場は屍体で埋つていた。広場には垣があり、幾つかの入口があつて、そこには人が内側から外へ出ようとして倒れ、その上にまた倒れ、それを乗り越えようとしてまた倒れて、その高さが三メートル以上あるように見えた。」と記されている。

正木直彦(注17)は一ツ橋にある文部省にいた。正木は東京美術学校の校長を務めていた。「大正十二年の九月一日は、朝から雨が降つてみた。」とまずは当日の天候が記されている。院展や三彩会に行くために朝から出かける支度をしていたところに、文部省の松浦次官から呼び出しがあつた。正木はすぐに袴に着がえて人力車に乗つて家を出た。二階の次官室で対談し、それが終わったのが十二時ちよつと前だつたという。「どうです、昼飯を一緒にやつて行つては……」と誘われ、「ぢや、いかうか。」といった利那、「突然大揺れに揺れ出した」。

松浦は忽ち脱兎の如く部屋を飛び出した。然し私は平静地震に対しては割合呑気な方だつたので、今に止むだらうと思つて再び椅子に腰かけて見て居た。すると、止むどころか、次第に激しくなり、忽ち本棚の中から本が飛び出す、頭の上の壁が落ちて来る。

その中、ドーツと何か地響きのやうなものが感じられたので、サツとテーブルの下に身を跼めた。瞬間、大音響と共に、松浦君の坐つてゐた背後の、煉瓦を積み上げた大煙突が倒れて来た。砂塵の中で顔を上げると、テーブルは砕かれ、床には大穴が開いて、煙突が階下へ落ちてしまったことが判つた。

そこではじめて、「これは家が潰れるかも知れん、出よう！」と思ひドアのところへ進んだ。ドアはなかなか開かなかつたが、何とかして廊下に出ることができた。だが、「盛んに揺れ続けるので、とても真直ぐには歩れ」なかつた。階下に降りようとすると、車夫が呼んでいるのが聞えた。来る時に乗つて来た人力車の、おそらくはお抱えの車夫であろう。そこで車に乗り文部省を後にした。「既に女子職業学校が熾んに焼けてをり、更にあちらにもこちらにも火の手が見られ、逃げ惑ふ人々の洪水で」あつたが、何とか飯田橋の自宅に戻ることができた。まずは学校へ電話をかけたが通じない。どうしようかと気を揉んでいるとやがて学校の方から全て無事との知らせがあつた。

翌朝、困難を冒して学校へ行つたが、校内は避難者でいっぱいであつた。避難者に対しまず水の供給が第一と考へたが、水道は断水状態であつた。幸い校内には井戸があつたが、しばらく使用してないので危険だと考へ、みなで井戸替えをして水を使用させることができた。その他、様々な救援活動が詳しく記されている。

職員や学生も追々集つて来たので、それらでもつて救護班を組織し、間もなく出来た上野の山の救護本部と連絡を取つて炊出しを開始した。

一方では、手わけをして避難民全体の戸籍帳をつくり、更にそれを門前に掲示した。又、学校の門の前を通る人に、案内所を設け、そこで姓名と行き先とを帳面に記させ、又、何ういふ人を尋ねてゐるといふ聴取帳をつくり、同じやうな事をば大学や高等学校でやつて貰つて、互に連絡をとつて、尋人の便宜を図つた。

更に又、一方では逃げ込んだ人に怪我人もあれば病人もあり、その日の中に

お産をする人もあれば死ぬ人も出来る。それらの為に赤十字に交渉して、近県から来た赤十字班を学校内に三班配備し、学校の内外の傷病人の手当をして貰ひ、一方では職員の家族の手で産衣やおむつをつくらせた。それが瞬く間に十幾組も無くなつてしまふ。

今日の災害にも役に立ちそうな内容であるが、こうして九月から十月いっぱい休校にしたという。

栗田確也(注18)は神田小川町から神田神保町の書店兼自宅に帰る途中であつた。「三省堂の向いの横町を入つたところ」といつているので、小川町なのか神保町なのかは決めがたい。小川町へは銀行の用事で、「ヨチヨチ歩き」の子供を連れていたという。前年の一月に生まれたというからまだ一歳と八カ月である。「なにぶん、とつさのことで、立つておれないほどのゆれ方と異様な音、それと同時に、ガタガタと屋根瓦が落ちて来る。」と記されている。「これはただ事ではない。このままでは危ない」と直感し、子供を抱きかかえてトタン塀があるところまで走つた。幸いそこに箱車があつたので、横倒しにして子供をその中に入れた。「ここを動いてはいけない。迎えに来るまで待つていろ」というなり、百五十メートル余り離れた店に飛んで行つた。「家の中は、朝まで整然と積んであつた本がひっくり返つてはいれないくらい。二階へのはしご段と壁とが三十センチもあいていました。まだ余震があるので、取りものに来ていた人たちが机の下にもぐつて、不安な表情で外を見ている、といった情景でした。」とその時の様子を記している。

まずは女中に子供を連れに行かせた。次に「寝ている妻を一刻もはやく避難させなければならぬ」と考へ、「まず如水会館の角まで肩にかかえ、女中と子供とともに避難しました。」と記されている。妻は一年ほど前から病気がちであつた。栗田はすぐに引き返し、蒲団などを持って来て妻を休ませた。そして再度引き返し、今度は帳簿と米の入つたお鉢、おかずの鍋などを運び出した。栗田はまたまた引き返したが、「そのころは、もう三崎町の方から火の手があがったばかりでなく、すぐ斜め四軒さきの家からも火が出てお隣りまで燃え移つて来ていた。」「あたりは荷物をかついた人や積んだ車が右往左往、騒然としていました。」と記

している。「こんどは一体、何を出そうか」と考え、「よし、一番いいものを出そう」と思い取り出したのは、結婚式で着た自分と妻の式服であった。だが、それを店員に運ばせ、栗田はまだ店に残っていた。火はますます近づいて来る。近くにいた巡査から逃げるよう促されたが、腕組みをして店の前に立っていたという。「三年間、自分の全精力を傾け、営々として生活を立て商売を営んで来た家」を去るに忍びなかったのはもつともであろう。だが、最後には表札をはがして逃げることにした。「それを懐にいれ、火と煙に包まれかけた家に向って「さようなら」と最敬礼をして、いよいよ見限りをつけ、引きあげたのでした。」と万感の思いが記されている。

妻たちのいる避難所に戻った栗田は「こも危ない」と思い、「一ツ橋のたもと」に再度避難した。そこで昼飯と鍋の魚を手づかみで食べたという。夕方になると火の手がまた近づいて来たので、またまた避難することにし、今度は「お濠ばた」の方に向かった。ちなみに、ここまでの記述には、最初に連れていた子供のその後には言及がなかった。もちろん無事だったということだろうが、まだ二歳にならない子供がよくも箱車の中で一人迎えを待っていたものである。ここではじめて「小さな元を女中におんぶさせ」と記されている。「元」は子供の名前である。「お濠ばた」まで行くと、橋を渡ってみな平川門から宮城に入って行くので栗田らも入って行った。妻はぐったりとしていたが、何とかそこに落ち着くことができた。だが、橋のたもとに荷物を置いてきたことに気づき、すぐにまた引き返したというのには驚く。その時の様子が記されている。

その時分には如水会館が火に包まれて、煙はもうもうとあがり、その熱風がこちらに吹き寄せて来て、ものすごい熱さでした。しかも、橋のところには、三、四頭の馬が行ったり来たり、狂奔しているではありませんか。これは、そのころ錦町河岸が船着場で、建ち並んでいた運送屋の馬が離れて行き場を失い、必死になってあばれていたのです。さらに驚いたのは、私の店の斜め前に当る家の老夫人が娘さんをだきかかえるようにして、髪をふり乱し、はだしで橋の方から飛んで来た姿でした。その娘さんは臨月であつたらしく、当人も母親も

まるで気違いのようでした。

栗田は荷物を持って宮城に戻って来た。「もう暗くなったはずなのに、空は夕やけのように一面にあかく、広場もみんなの顔が見えるほど明るく、火の勢いは衰えそうありません。お濠の向うには、盛んに燃えている火が見えます。石垣のところに行ってみますと、いまの労働省のところにあつた大きな建物、当時の大蔵省が火を噴いていました。」と記されている。

夜が明けたが、ときどき余震が襲ってきた。「大手町の方にはもの凄いい煙がまだもうもうと盛んにあがって、燃え続けている。その騒音もひどい。広場には、私たちと同様に辛うじて逃げて来た人びとが、とにかく持ち出して来た数個の荷物のわきに数人ずつかたまつて、不安と疲労に襲われたまま茫然と立ちすくんでいる、という情景でした。」と記している。だが、自分一人は違っていたといっている。「文化は焼けない。学問も焼けない。チャンスだ。これからやるのだ」という「未来への希望と確信」に満ち、「にわかには再起、再建の意気が燃えて来た」というのである。明るくなるにしたがい人びとは動き出し、また追々と惨害の情報もたらされた。「本所、深川方面は全滅だ。みんな焼け死んだ」、「日本橋、京橋から銀座通りも丸焼けになった」といったひどいニュースばかりだったといふ。

最も困ったのは食料である。妻は弱り切り、一歳の子供も元気がない。栗田は何とか食料を調達しようと、またまた橋のたもとに引き返した。「道には焼け出されて着のみ着のままの人、荷物をつんだ車が、ただあわただしく往来してしました。神保町の方に向つては、いま岩波書店と小学館になっている建物、当時、商科大学の研究室だった二つの建物以外は、大部分が焼け落ちて、見るも無残な焼け跡に変わっていました。しかも、まだ燃えているところもあるといった状況でした。」とその時の様子を記している。辺りを見回しているうちに幸運にも店員に遭遇し、「しよがを入れた御飯の折詰のようなもの」を四つもらった。また別の店員からはお握りももらった。それらをどこから調達してきたのかは記されていないが、「全く涙の出るほどの感激でした。」と述べているのは、むべなる

かなである。栗田はすぐに宮城内に引き返し、みんなで食べたという。

幸い朝食にはありつけたが、病身の妻をゆつくり休ませる場所が必要である。これまた幸いに、お握りしてくれた店員の家が無事だったというのでそこに厄介になることになった。混乱の中、その店員が人力車も調達して来てくれた。まずは妻と子供を乗せ、その後引き返して今度は自分が乗って行った。車の上から見た様子を、「神田から本郷の方にかけては、すっかり焼け野原になって、ところどころに焼けたビルの残骸があり、焼け跡にはまだ煙がたちのぼり、濠端の道は、焼け出された人たちで一ぱいといった具合でした。」と記している。その頃になつて、「朝鮮人が焼き打ちに来る」といった流言が聞こえてきた。「例えば、その辺の塀に白墨でカギの印の書いてあるのをみつけ、それを朝鮮人のつけた焼き打ちの目印だなどともつともらしくいつて、だれもかれもおそれたのです。」と記している。加えて、「まだラジオやテレビがあるわけではない。大地震、大火事、それに加えて、この朝鮮人さわざで、それから数日、市内はどこもどこも、全く不安の連続でした。」と記されている。

だが、店員の家に落ちてくや否や、栗田は早くも翌日に家を探し出しすぐにそこに移った。「板橋の近くで、玄関を入って二畳、その奥に六畳という、至って狭い家でした。家賃は確か七円だったと思います。」と記しているが、幸運以外の何ものでもなかったというべきであろう。米も一俵手に入れた。「値段は多分、十七円だったと思います。」と記している。それから材木を購入し、バラックを建てる手配をした。準備のため焼け跡を片付けていると、名古屋にいる弟がひよっこり現れた。「東京は全滅だ」というニュースを聞いて、いてもたってもいられずやって来たのである。東海道線は不通だったので、中央線で来たということであった。七日には大工が入り、二週間とはかからず十八日頃にはバラックが出来上がったという。「これは東京の焼け跡に一番早く作った、バラックの第一号でした。」と記しているが、にわかには信じがたい。「日本橋、本所、深川、それから浅草の方まで、一望、ひろびろと焼け野原になっている中に、私のところだけがポツンと一軒だけ目だつて見えた」からであろうが、いわば東京中を見て回ったわけではもとよりない。バラックが建った翌々日からは焼けた小売書店や発行

所の訪問をはじめた。焼けたところが多く苦労したが、再起のために一生懸命にやつたといっている。

なお、栗田の自伝には、「宮城の石垣の上から、「焼け出された群衆」というキャプションが付いた写真二葉と、「焼け跡にポツンと——九段坂上から」と題された挿絵一枚、加えて『大正大震災大火災』の表紙写真が掲載されている。前二者の写真は自ら撮影したものとは思われず、どこから持ってきたかは不明である。試みに『大正大震災大火災』を閲してみたが、そこにはなかった。この本は早くも十月に講談社から出版され、大量の写真が掲載されている。挿絵の方は本自伝のために用意したものであろうが、本人の筆によつたものはこれまた不明である。それを見ると、確かにバラック様の家が「ポツンと一軒だけ目だつて」いる。

金子佐一郎（注19）は神田小川町の路上にいた。慶応義塾大学の学生であった金子は、正午近くに親友の家を訪ねたが、友人が不在なので辞去した。長い路地の半ば過ぎまで来た時、「異常なショックを感じ」、「とつさに路地を走りぬけ小川町交差点のまんなかに飛び出した」という。「ふりかえつてみて、ぞつとした。いま私が歩いてきた路地は、天下堂の漆喰壁がくずれおち、すっかり埋まつていではないか。」と記し、続けて「もし、須賀君の家が出るのが幾秒か遅れていたら、私はその漆喰の下敷きとなり、死んでいたにちがいない。」と記している。「須賀」がその友人の名であることはいまでもない。父母が心配になり日本橋本石町へ急いだ。「沿道の家は軒並み壊れ、実にさまざまのものであった。土蔵などもほとんど壁が落ちて役立たず、空の電車が軌道のうえで立往生している。」とその途中の様子が記されている。家は土蔵の壁がはがれ落ちていたが、怪我人もなく一同無事であった。だが、昼食の握り飯を食べていると、あちこちで出火したという噂が伝わってきた。逃げて来た小川町あたりもすでに燃えているという。そのうちに火の手が次第に迫ってきた。余震の合間を見て荷物を持ち出したが、そこにもどんどん火の粉が降りかかってくる。「荷物のうえにふりかかるのを、いちいち消していたが、私は自分のふところに入った火の粉を人に注意されてあわてて消す始末であった。」と記されている。このままでは危ないと思い、北品川の家に避難することになった。そこは、祖母と弟と金子自身が住んでいる家で

あった。父母に加え、幼い弟と女中らの避難は大変であったが、麻布あたりで幸いタクシーに乗ることができ、無事北品川の家に辿り着くことができた。ここもまた壁が少し落ちていたが、みな無事であった。

翌二日になって、「朝鮮人の暴徒が襲来するというデマが流れはじめた」。三日夜になると、「町会長から、婦女子は全員高輪南町の毛利侯爵邸に避難するようにと聞いてきた」。その後、女中が「いま怪しい男がうちの井戸をのぞいていました。毒をいれたのかもしれませんが」といい出したので、いろいろと調べたが異常はなかった。「あとで、これは、近所の家で、地震のため水道が止まったので、井戸掘り工事を頼まれた井戸屋がうちの井戸のようすを見に来たということがわかった。」と説明されている。三日には、日本橋本石町の家の焼け跡を見にも行った。「銀座通りを通っておどろいた。すっかり焼野原になっている。銀座尾張町四丁目角にそびえていた服部時計店の時計台も、向う角のカフェライオンも、山崎洋服店（現三越の所在地）も、みな焼失していた。」と記されている。それから毎日、本石町の家の焼け跡整理に歩いて往復した。いつのことかは記されていないが、整地が終わるととりあえずバラックを建てたという。

井口基成（注20）は猿楽町の自宅にいた。家族はみな千葉の寒川に家を借りて避暑に行っていたが、京華中学校の学生であった井口は学期初めなので、祖母と二人で自宅にいたという。昼近くになり祖母がご飯を用意してくれた。「一人で食事をして部屋から廊下に出たとたんに家全体がグラツと大揺れにゆれた。何だろうと思ったら今度は左右にミシミシ揺れはじめ、天井に近いところの家の梁がパターンと口を大きく開けて、またくつつくのを見ただけで、何かわけがわからず、ボーツとするばかりだった。」と、オノマトペを多用して記している。井口の家は印刷工場を営んでいたので、製品を入れた「ボール紙が地震とともにガラガラ崩れ落ちて広い部屋一杯にめちゃくちゃになっていた」。だが、やっと揺れがおさまった時には「ホツとすると同時に急にこわくなつた」という。続けて、「祖母と一緒にちぢこまって外を見たら、余震のあおりで隣の家がぐらぐらとしてそのまま横に傾いて、あれっという間に、ペチャンとつぶれてしまった。」と記されている。そのうちに隣家からは火が出、またたく間に燃え広がった。「家に

は誰も消火する人もいないし、水道の消火栓をひねっても水も出ない、それにぼくも祖母もうろろするばかりで気ばかりあせって何もできない。火はぐんぐん燃え広がって、ついにぼくの家に移り、それから三十分ぐらいですっかり灰になってしまった。」と記されている。「それでも少したつて工場の方から職人が駆けつけてくれ」た。「荷車を一台どこからか持ってきたので、わずかな荷物や蒲団はどうやら運びだしその上に積み込んだ。」と記しているが、家は「すっかり灰になってしまった」。のではなかったか。前後がやや混乱しているが、むろん運び出したのは家が灰になる前であったであろう。さてどこへ逃げようかということになったが、駿河台、本郷方面は大変な混みようである。そこで、宮城の方に向かい、竹橋のあたりに避難した。「その晩は東京中が火の海になって空は真赤に染まって、特に東南にあたる下町の神田から深川の方面は火の粉と煙が舞い上がり、入道雲のように空をおおって渦を巻いていた」。「眠れないまま原っぱのようなどころで夜を過ごしたのだが、ときどきガラーン、ガラーンとものすごい音がして近くの鉄筋の建物が崩れ落ちるのが聞こえ、ほんとうにこの世の生地獄というのはこんなものかと思った。」とその夜のことが記されている。

そこで二晩を過し、三日目になって父親が訪ねて来た。家の焼け跡に避難場所を書いた立札を見て来たというのである。だが、以前からいざという時には持ち出すようにいっつけられていた箆笥の引出しと家紋付の背負箱を持ち出すのを忘れ、父親はかんかんであったといっている。それから間もなくして父親にいわれ、職人と一緒に千葉にいる家族のもとへ向かった。その途中の様子を次のように記している。

浅草橋のところまでくると市電が焼けていて、その周りに死体がごろごろ転がっていたり、まだくすぶっている焼野原のあちこちでも死体があるらしく、何ともいえない臭いがむんむんしていて気分が悪くなってしまう。ようやく両国橋までたどり着いたら、橋がすっかり焼け落ちていて、それでも何人かが行くので残された鉄の橋げたの上をこわこわとついで渡って行った。ちよつと下をのぞいて見たら川の中を土左衛門がポックリ、ポックリあちこち

浮かびながら流れていく。次の川のところまでくると、そこもまた橋がなくて、まるで綱渡りみたいにして用心しながら鉄棒の上を、たどって行ったことを思いうし出す。

丸一日かつて井口らはようやく千葉の寒川までたどり着いた。

木村守江（注21）は神田駿河台の路上にいた。慶応義塾大学の学生であった木村は、お茶の水駅で電車を降り神田小川町方面に向かって歩いていった。明治大学の前にさしかかった時である。「前方から走ってくるトラックが妙に揺れて見えただ。」という。「オヤ！ と、足を止めた瞬間、トラックも止まり、グラグラと大地が揺れ、おぼえずしゃがみこんでしまった。」と記している。続けて、「ふと、頭を上げて明治大学の方を見ると、記念館の赤レンガが積木細工のように崩れ落ちていく。反対側の金杉病院の方を見ると、病院のレンガ塀が見る見るこわれ落ちた。」と記されている。「これは大変だぞ！」と恐怖が全身を走った。あたりは土煙が立ち、女性の悲鳴や子供の泣き声が聞こえてくる。とにかく家に帰らなければと思いい、神田小川町にある下宿に向かった。下宿もそこのお婆さんも無事であった。お婆さんと昼飯を食べていると、「火事だ、火事だ！」と叫ぶ声があった。外に出てみると「神保町や猿楽町の方面に黒煙がもうもうと上がっている」。そのまま駿河台の方に向かうと、「東京堂や三省堂などの大きな建物が炎上しており、窓々から炎が吹き出していた」。続けて、「見る見るあたり一帯に燃えひろがり、風さえ加わって、人々は火を消すことより、老人や子供の手をひいて避難したり、家財道具などを運んだり、だれもが必死の形相だ。担架にかつがれて行く人、髪ふりみだして駆けていく女、押しあい、へしあい先きを争って避難する人波をぬってアゴひもの警官が何やら叫びながら走っていく。」「風がないところも火の手があがると、急に竜巻が立つように勢いづき、風に乗って火炎が家々をなめていく。」と記されている。これでは下宿の方も危ないと思いい引き返した。下宿に戻ると自分の部屋に行き、とつさに病理学の原書二冊を抱えてきて、下宿のお婆さんと一緒に一ツ橋方面目指して駆け出した。木村は医学部の学生であり、夏休みは九月十日までであったが、実習や教授の指導を受けるため八月二十五日に上京したと

いつていた。

一ツ橋方面に逃げた二人は、「それから皇居のお堀に沿って陸軍測量部のある広場に避難した」が、そこは避難者であふれていた。「荷車や、リヤカーで荷物を運んできた人もいたし、戸板で運ばれてきた病人もいた。とにかくどちらを向いても人と荷物でごったがえしていた。衣服も破れ放題、顔は煙りですすけ、目ばかりギラギラ血走っている人のあつまりであった。」とその際の様子が記されている。だが、何とか安全そうな場所を見つけてやっと一息をつくことができた。すると、部屋に残してきた大島紬の羽織と着物が気になり出した。母親が丹精をこめて縫ってくれた生まれはじめての大島紬で、まだ一度も袖を通していなかったからである。木村はお婆さんの反対を押し切って小川町の下宿に向かった。しかし、「行くほどに、駿河台から小川町、神保町一帯は黒煙が盛んに立ちこめ、なかには火を吹いているところもあって、どこが小川町かさっぱり見当がつかない。風の加減で火の粉が飛びかい、下宿のあったあたりはついに見きわめることができなかった」という。木村はやむなく引き返した。その途中、お菓子屋の前に「ドロップのいっぱいまったガラスの容器」が転がっているのを見つけ、なんとなく「容器を拾い上げ、肩にかついだ」という。「肩にかついだ」というのだから大きなものだったのであろう。駄菓子屋でよく見かける大きなガラス製の容器が想像される。「わたしにしてみれば、道路端に放置しておくのはもったいない、と拾ったままで」あるといっているが、加えて「だれもが大きな荷物を後生大事にかかえているなかで、素手で歩くよりはその方がかえってよいと思」ったからであるとも述べていた。おもしろい感覚といえるであろう。その晩はお婆さんと一緒に広場で一夜を明かした。

翌朝になっても避難民は増える一方で、みな空腹を訴えはじめた。その時にガラス容器入りのドロップが威力を發揮した。周りにせがまれるままに分けてやっただという。三日目になって、新たな避難先を求めて去って行く人々も出てきた。お婆さんは空腹を訴え、飯田橋近くの親類の米屋へ連れていってくれという。二人は飯田橋方面へと向かったが、辺りは焼野原で米屋は見つからなかった。すると、今度は小石川の親類に連れて行けという。だが、二人とも疲れ果てていた。「三

日二晩ろくに眠らず、しかも路上でドロップを少々口に入れてだけで飢えをしのいできたのだからムリもなかった。大きなふる敷包みが重かった。おばあさんの歩調にあわせてのろのろ歩くのでかえってくたびれた。おばあさんもほとほと疲れきった様子である。」と記されている。だが一休みしている時、前方から歩いて来た人が「護国寺へいくと、鳩山家で炊き出しをしているからそこでおにぎりをもらいなさい」と教えてくれた。行ってみるとたくさんの人が行列をつくっていたが、大きいお握りを一個ずつもらうことができた。「固く。パサパサしていたが、三日ぶりにありついた米の飯である。水のみながら胃の中へおくりこむとなんともいえないオツな味がした。」と記されている。

小石川の陸軍砲兵工廠の火薬庫近くに来た時である。「朝鮮人だ、朝鮮人がいるぞう！」という叫び声が起り、人々に取り囲まれた。「おれは日本人だ。朝鮮人なんかでないぞ！」と怒鳴り返したが、むりやりに交番に連れていかれ、そこでも抗弁したが聞き入れられず小石川警察署へ連れていかれた。「在学証明書」を示し慶応大学医学部の学生だといったが、それでも信用してもらえない。「在学証明書」とは学生証のことであろう。それならば大学に電話して確かめたらいいじゃないかと主張し、何とか信用してもらえたという。「わたしは、故郷四倉の仁井田川で幼いころから泳ぎ回わり、それが後々まで続いて、まっ黒に日焼けしていたのですっかりやつれ、目ばかりギョロギョロしていたので日本人ばなれした容ぼうに見られたらしい。」と記されていた。釈放され、それからお婆さんと小石川の親類の家を目指したが、そこも分らずじまいであった。

だが、それで終わりではなかった。今度は埼玉県の蕨市に親類があるという。そこなら間違いないというので行くことにした。小石川から上野に出て、駅頭で炊き出しのお握りをもらい、そこから日暮里をぬけて夕方には荒川の土手に着いた。「この間一日ほどかかったが、河原には避難民が山をなしていた。橋が焼け落ちたため、工兵隊が船を並べてかけた橋を渡らねばならない」。だが、ここでひとつ問題が起きた。大変な混雑なので大きな荷物は絶対に駄目だというのである。ここまでお婆さんは大きな風呂敷包みを背負って来ていたのである。お婆さ

んも全く引かず、押し問答が続く。結局、その日は渡ることができずに土手で夜を明かした。「仰ぐと、予想もつかなかった大震災で十何万の人が尊い命を失い、何百万人という人が苦しんでいることなどツユ知らぬげに、空は澄み、満天に星が輝いていた。」と記されている。

翌日、思案の挙句、荷物は自分が泳いで運ぶことに決めた。先に引用した部分にもあったように、小さい時から泳ぎは得意であった。お婆さんをまずは対岸に渡らせ、木村は川岸に散乱している板や丸木を集めて筏を作り、それに荷物を乗せて押しながら泳いだ。「川はかなり深く、足が立たなかった。川岸には、何千何万とも知れぬ被災者たちが次々と押し寄せ、渡河の順番を待っていた。その群れの中から「あぶない！ 早く岸に帰れ！ そんなことしたら死んでしまうぞ！」などと叫ぶ声が聞えた。」と記されている。「まん中ごろになると流れは急になり、イカダが流されて思うように進まない。必死になって泳ぎ、懸命にイカダを押しした」。だが、「流されながらもイカダは少しずつ前進し、急流を過ぎると、面白いほどグイグイと岸に近づいた。」と記している。やっと対岸に着くと、辺りから一斉に拍手が起こったという。それから蕨市への道のりは記されていないが、親類の家は幸い見つかった。一家の人々からは労をねぎらわれ、炊き立ての白いご飯とみそ汁に舌つづみをうった。だが、そこには二時間半ほどしか滞在しなかった。汽車が通じていることが分かったので、帰郷することに決めたのである。ドイツ語の本二冊だけを持ち駅に向かった。

わらび駅の構内も列車も被災民でいっぱい。汽車に乗ろうと必死であった。順番など待とうものなら後からも横からもおしのけられてしまう。乗車口から乗るのを待ちきれず窓から飛び乗るものもあり、立錐の余地なく、列車の屋根にのぼって煤煙で真っ黒に煤けているものもあった。もちろん座ることなど出来ない。地方の親類、縁者、知友を頼っていく被災者、故郷に引きあげる者、それぞれの思いを秘めているが、だれも思いは同じ、心配があるのだろう。騒がしい割に重苦しさが車内にただよっていた。

水戸まで行き、常磐線に乗りつぎ、福島と茨城の県境に近い南中郷駅に着いた。ホームにはいっぱいの人ばかりで、木村は何事かと窓から顔を出した。その途端、「こいつだ！こいつだ！」と叫ぶ声が出て、周りを取り囲まれた。そして一方的に引きずり降ろされ駅長室に連れていかれたのである。その間に汽車は発車し、大事なドイツ語の本は網棚に載せたままだった。駅長室に行くと、「あんな、朝鮮人じゃないのかね」と聞かれた。「おれは、慶応大学の学生だ。断じて朝鮮人ではない。震災で焼けだされて、これから四倉の実家に帰るところだ」と答えた。押し問答の末、消防団長をしていた父親を知っている者がいてようやく誤解は解けた。腹が空いているので食べ物と、まぜご飯を出してくれ、網棚に載せたままのドイツ語の本についても手配をしてくれたという。その日は駅長室で一夜を送った。翌朝、一番列車で故郷の四倉に向かい無事到着した。現在のいわき市である。その夜は浴衣に着替え、手足を思う存分伸ばして座敷の真中に転がったといっている。

それから十日ほどたった頃である。東京のことが心配になりだした。新聞等の報道で悲惨な状況が伝わってくる。「おれは、医者卵だ。こんな大変なときに何かの役に立たなければ……」と思うとじつとしていられなくなり、九月半ば過ぎに上京した。「東京・本所の被服廠跡に、バラックの病院が建てられ、そこで被災者の医療救護が行なわれていた。わたしは、慶応大学医学部に顔を出すと、大学からすぐにそこに派遣された」。「本所病院という産科の病院だが、診療や応急手当てを求める人がいっぱい、入院患者も三百人余りいた。」と記されている。医師一人と医学生三人、看護婦十人という陣容だったので大忙しであった。木村は泊まり込みで勤め、結局一年間そこで働いたという。「医学生の実習だから給料はなかった。しかし、泊まり込み食事つき、つまり下宿料がただのうえ、貴重な経験が毎日待ちかまえていた。」と記されている。

曾我祐準（注22）は神田駿河台の自宅にいた。曾我は枢密顧問官の職にあった。地震発生時のことについては具体的に記されていないが、その被害状況は次のように記されている。「洋館日本館共に瓦は大半剥落し、四壁の亀裂固より多かりしも、一室も傾倒せし所なきが如し。独り土蔵は損害最甚しく、是とても倒壊に

至らず、唯入口の庇墜落して、戸前を圧し、全く戸を開き能はざるは、不幸の甚しきものであった」。家族全員が前庭に出て握り飯を食べていると、猿楽町辺りで出火しているのが見えた。そのうちに火は迫って来て洋館の屋根に飛び火したが、たまたま駆け付けた左官の職人と下男と協力し何とか消し止めた。曾我は息子を引き連れ二階へ上がった。「聖上初め五陛下の御真影を卸し、之を保持せしめ、又祐邦は階上の書画幅を、福田は洋服を取出す。又書斎に在りし書籍（記伝類在中）及小箆箆二棹を前庭に出す。」と記している。だが、「此外正服、勲章、記章等を初め一物を出し得ず。」とも記されている。祐邦は息子、福田は使用人である。火はますます近くに迫るので全員避難することにした。女中らを含め十人を超える人数である。あちこちで休憩を取り、神田須田町に至った。「炎焰道を遮ぎり、危険益々加はる、困りて意を決し上野に向ふ。此際の雑踏混乱、紙筆の盡すべき所に非ず。」と記されている。上野広小路までたどり着いたが、上野の山は大変な人ばかりである。そこで岩倉鉄道学校に向かった。幸い校内に入ることができ、寄宿舎の賄い方から握り飯をもらい飢えをしのぐことができた。「午前八時に及び」、学校もまた安全を期し難い状況になってきた。そこで上野駅内に停まっている客車に避難し、その夜はそこで一夜を過ごしたという。であるなら、「午前八時」は「午後八時」の誤りであろう。

翌二日になっても火勢は衰えない。午前十時頃、息子が人力車二台を調達して来たので、妻と娘を大久保の息子の家に避難させた。幸いそこは無事だったのである。食料も何とか調達し、午後も客車内に留まった。「日漸く西に傾くや、此近傍一面大抵焼き盡し、区役所、停車場及び学校を余すのみ。校員、校の安否を報ず幾回、或は安と云ひ、或は否と云ふ。情報一ならず、既にして火、区役所に及び、東南風も亦烈し。」と記している。やがて駅も危険だということで、上野の山に避難することにした。押し合いへし合い何とかたどり着いたが、適当な場所が見つからない。そこで精養軒に行き、店員に頼み込み廊下に避難させてもらったというのだから幸運である。「此の夜炎焰東南半天に漲り、惨憺たる其状神魂をして寒からしむ。半夜上野山中の枯木を焼き、亦常磐花壇を焼き盡すも、幸に火、精養軒に及ばず。」と記されている。続けて、「中夜又突然鮮人暴拳の蜚語頻

りに至り、警吏の如きもの山中を大呼して避難民を谷中墓地に行かしめんと欲したるも、応ずるもの甚だ多からざりしが如し。余は軒員の請に従ひ、円形の廊下に移り、天明を待つ。」と記している。

三日の夜が明け、このままではらちが開かないと考えた曾我は、息子のいる大久保に避難することにした。途中、小石川の伝通院の知人宅に寄り一飯を請い、一日以来はじめて満足な食事をする事ができた。午前八時、使用人を大久保の家にやり人力車二台を連れて来させ、午前十一時には落ち着く事ができた。だが、大久保の家は狭小で家族も多い。とりあえず妻と娘だけを避難させたのはそのためであろう。その上さらに十人近くの人が押し寄せたのであるから、その混乱は想像に難くない。長くは滞在できないと考えた曾我は、熱海にある別荘に移ることにした。熱海は被害激甚と聞いていたが、実際はそれほどもなく、別荘は被害軽微であることが分かったからである。だが、熱海に向かったのはそれから二十日後の二十三日のことであった。

陸路は未だ交通不能だったため、午後二時に大正丸という船に乗った。「日暮風暴し。三浦岬に至れば益々激し。船の激動甚し。船客一人として疾まざるものなし。」と記されている。さらには、「船は大動搖の儘航進す。此晚九時熱海着の約なりしも、風浪の為め不可能となり、網代に達するも、夜中と云ひ、風烈と云ひ、入港出来ず、港外に碇す。」と記されている。その夜は船中で一夜を明かした。翌二十四日、風は未だ止まず雨も加わっていたが、何とか入港することができた。だが、熱海までの山路を越えることができず、その日は宿屋に宿泊。二十五日は晴れであった。山駕籠に乗って昼頃には無事別荘に到着することができた。なお、曾我の自伝には多数の写真が掲載されている。そのキャプションを以下に記しておく。ただし、一葉だけが付されていない。

「震災当時の万世橋駅前、広瀬中佐の銅像ある須田町の広場」

「震災当時の上野広小路附近」

「上の浅草方面」

「折れたる凌雲閣遠望」

「途中より折れたる浅草の凌雲閣（十二階）」

「丸の内方面の惨害跡」

「崩れたる鉄筋コンクリート家屋」

「神田橋より丸の内方面を望む」

「二重橋前の広場に避難したる罹災者達の仮小屋」

もう一つ付け加えていっておけば、曾我の自伝が刊行されたのは一九三〇年、震災からまだ七年しか経っていない時期であった。

岡田実（注²³）は神田駿河台の路上にいた。中学生であった岡田は、二学期の始業式の日であったが授業がないので学校へは行かず、三崎町の塾へ行っていたという。その帰り道であった。「お茶の水の橋の上にさしかかった時、不意に身体よろめきを感じ、地上に伏し、それからすばやく這い上がって橋のたもとにあつた桐の木にすがって立った。」と記している。「地震だ!! 目の前の家屋の屋根瓦は雪崩の如く落ちて壊れ、壁はごう然と音を立ててくずれ、土煙は空一面に舞い上がった。今までこうこうと輝いていた太陽は夕霧の中に沈むときのように光を失って赤く中天にその位置を示すだけであった。それも段々影が薄くなって、遂には濛々と立ち上る黒煙のために全く見えなくなった。」と記されている。

母親のことが心配になり、神田松永町の家に向かった。幸い母親は無事であった。遊びに来ていた従妹の帰りを待つて、秋葉原駅の構内に避難することにした。「附近の人はこの空き地を求めて集まっていた。どの人もこの人も地の底から揺り動かす魔力に度肝を抜かれて、ただ本能的に自己の声明を保つために動いているようであった。」と記している。やがて、「猛火は神田明神を一挙に焼きつくして間近かに迫った。黒煙はもうもうとして陰惨であった。一方日本橋方面で起つた火も和泉橋に近付いた」。そこも逃げるほかはない。「道路に出ると避難して来る馬車や自転車や自動車でほとんど全面塞がれて、荷物を背負つて動くことは容易でなかった。」「続いて行く人の群で御徒町あたりからは、百メートルを動くのに一時間もかかった。」と記されている。そのうちに辺りは暗くなり、いつの間にか母親たちとはぐれてしまったという。やむなく岡田は上野の山に向かった。「日頃広いと思う上野公園も避難者で一ぱいにつまって歩くことも出来なかった」。その夜は西郷さんの銅像の辺りで一夜を過ごした。その夜のことを次のよ

うに記している。

周囲には悪魔の舌の様な真紅の焰が次々に黒く見えている建物をなめて行く。しかし上野の山は暗闇であった。昼間の酷熱に引換え夜は意外に冷やかであった。肌衣だけで避難して来た子供はあまりの寒さに泣いている。若い夫婦も涎をかぶったまま、無言である。

現代の人情で予知し防禦し得なかつたこの自然の偉大なる力の前に弄ばれてゐる人間の弱さが見られた。若し、これが人間に与えられる試練であるとすれば、これによって大なる知的発展、人間的共存共栄に進展させねばならないであらう。

長い夜がようやく明けた。はぐれてしまった母親が心配で、とりあえずは家に戻ることにした。幸い家は焼けていなかったが、母親は見つからなかった。空腹のあまり、「桶にあつた泥水で飯を炊き、おひつに移し梅干を入れ」て食べたという。「下谷を南北に貫いていた数軒の猛火が東から西に移つて来た。風呂敷大の焼けた亜鉛板が空高く舞い上がっている」。岡田は再び上野の山に引き返した。母親を探しているうちに精養軒の前に来た。「そこには二十ばかりの死体があつた」。その中に母親によく似ている死体があつた。居合わせた人の話では、「上野の山下で踏み殺されたのだ」といい、「若い女の人が一緒に居た」ということである。ますます気になったが、着物には見覚えがなく判定がつかなかった。岡田は後ろ髪を引かれる思いで、姉が世話になつていゝ板橋の家に行くことにした。谷中から日暮里へ抜け山手線の線路に沿つて巢鴨に出、板橋に着いたのは三日の零時少し過ぎであつたという。そこで、「社会主義者と朝鮮人が騒動を起こしているので、軍隊が出動している」ことを聞かされる。疲れ切つていたが目が冴えて眠られず、時計が四時を打つてからようやく眠りについた。

朝起きて、家の主人と一緒にまた上野に向かつた。昨日見た死体はどうやら母親ではないことが判明したので、またまた自宅に行った。瓦の上に書き置きを残しておいた。昼頃にわか雨が降り出し、濡れになつたが、下谷から日本橋、

浅草へと母親を探して歩き回つた。翌日は一人で上野から神田、浅草と探し回りまた自宅に行つてみると、そこに母親がいた。従妹もおり、加えて小学校の友達のお兄さんがいた。その人が助けてくれたのである。その詳細も記されているが割愛する。

岡田らは十三日まで東京にいたが、全てを失つたためひとまず郷里に帰ることにした。郷里は香川県の多度津町である。避難民の証明書もらい中央線經由で帰郷したが、帰つた早々大杉栄夫妻と甥が扼殺されたことを知つたという。なお、これまでもいくつかあつたが、岡田の自伝は三人称で記されている。しかも、人物の名前はおおむね仮名で、自身の名もまた仮名で描かれていた。

田辺尚雄(注24)も同じく神田駿河台の路上にいた。田辺は音楽学者で、宮内省の楽器研究にも従事していた。その日、田辺は妻と昼食を取るために日本橋の三越で待ち合わせることにしていた。妻は長唄の稽古があり朝早く家を出た。正午に三越三階の待合室での約束だったので、少し早く十時に目白の自宅を出る予定でいた。途中で神田の写真店や銀行に寄つていくつもりだったからである。だが、来客があり出るのが少々遅くなつたようである。電車でお茶の水駅に行き、駅を出た直後であつた。「突然と大地震に出逢つた。私が歩いてきた方の向い側の家がガラガラと地鳴りがして倒潰した」。「辛うじて道路の中央に出ると同時に、今まで私が軒下を歩いてきたその家もくずれ落ちて来た。」と記している。懐中から時計を出して見るとちょうど十二時であつた。すでに妻との約束の時間である。田辺は日本橋めざして駆け出した。途中の神田橋は落ちていたが、何とか三越までたどり着くことができた。「三越では店外に避難している者は無数にいるが、その中には妻は見えない。そこで私は三越の店内に飛び入つたときには、店内には一人の影もない。店内では到るところに陳列棚が倒れて商品が床上に散乱している。私は血眼になつて妻の行方を探すのみであつた。金時計、ダイヤの指輪、真珠の首飾りなどが散乱しているのを、私は靴で踏んで走つた。」と記されている。だが、妻は見つからなかつた。そこで田辺は屋上に駆けあがつた。「全市中は一瞬の下に眺められる。そのときは既に八十八カ所から火が燃え上がつて、全市は猛火に包まれんとしている、一大壯観のパノラマであつた。」とその時の眺めを

記している。妻はまだ三越に来ていないのではないかと考えた田辺は、今度は長唄の師匠の家がある虎ノ門へ向かった。付近まで来た時、妻と偶然出逢った。師匠と二言三言話している時に地震に遭ったというが、十二時に夫と待ち合わせをしていることを考えると、少々不審である。師匠に布団を借りて、それを頭にかぶり外に飛び出した。うろろろしていると警察が来て、伏見宮邸の庭に避難するようにいわれ、そこへ向かおうとしていたところだったというのである。

私は妻の手を引いて、一刻も早く火の外へ出ることを勧めた。丸の内を抜け、警視庁（当時帝劇の隣りにあった）や帝劇が猛火に包まれているのを眺めながら、神田に出ようとした。しかし神田橋は既に落ちてしまっている。一ツ橋を渡ろうとしたら、その向うは火の海である。ようやく雉子を渡って九段坂下に出た。後を振り返れば神田は一面の火の海である。九段坂上の富士見町も火で包まれている。私は火と火との間を縫うようにしてヤット牛込見附に出た。私が大正年間を通じて永く通っていた宮内省雅楽部の庁舎は盛んに燃えていた（当時雅楽所は牛込見附内にあったが、消失後現在の宮城内に移った）。それを名残惜しく眺めつつヤット神楽坂に出たのである。

神楽坂あたりは火を免れていた。一安心したところですぐに考えたのは食料のことである。有り難いことにはたくさんのお金を持っていた。妻との待ち合わせ場所に行く前に写真店と銀行に寄るつもりだったと述べていたが、銀行へはお金を納めるためだったのである。そこで、食料品店があることに立ち寄り、罐詰類を二人で持てるだけ買い込んだ。そのほか、天ぷら油やうどん粉、ろうそくや菓子なども買ったという。帰宅してみると、目白の家は幸い無事であった。「その日から屋内を掃除し、家族一同充分に食べて、家の中で眠った。」といっている。二日ほどすると、「朝鮮人が放火して廻っている」という噂が広まった。「三千人の朝鮮人が箱根山を越えて東京を襲撃せんとして押し寄せて来て、わが陸軍は小田原附近でこれと目下交戦中である」という噂も聞こえてきた。三日目頃には町内に自警団ができ、輪番で街角に立たされた。「噂によると朝鮮人、或いは社

会主義者が各戸の井戸に毒を投げ込んで行くと言い、警察からもその意味の布令が廻って来た。私はそんな馬鹿なことは無いと思っただが、自警団長からの通達で、とにかく自宅の井戸を護るために、伝家の日本刀を腰にして警備にしていた。」と記されている。すると、隣町の自警団員が、「今六十人の朝鮮人がこちらへ向いて襲撃して来るから、警戒せよ」と伝えてきた。そんな馬鹿なことはあるまい、きつとデマに違いないと思っていたら三十分ほどしてまた伝令が来た。「先刻の報告は誤りで、六十歳位の朝鮮人らしい風態ふうたの男が一人、こちらの方に向って歩いてきたのである」というのであった。要は、「六十位の人と言ったのが、次々と伝えている間に六十人となってしまった」という訳である。

地震後十日あまりたった頃である。「芸能人救済の目的を以て集合されたい」という通告を受けた。どこからの通告かは記されていないが、丸の内唯一破壊を免れた帝国ホテルで会合が開かれた。その結果、まず第一に宮城道雄一家を救済することになったという。

「台湾総督府に頼んで暫く台湾に避難させ、その間台湾各地で演奏会をやつてその生計を維持するようにすること」と記されている。首尾よくそれは実現し、宮城は数ヶ月後に無事帰京したという。また、会合の席上、田辺は復興の一助となるべく軍楽隊による演奏会を提案した。それは十月はじめ、日比谷公園と上野公園で開始されたという。「市民はいかにこれを喜んで迎えたことであろうか。そのために市民の心は正常に立ち返り、その勇壮な音楽によって、勇気百倍して帝都の復興は目ざましく遂行されて行った。」と自賛している。

石山堅吉（注25）は神田駿河台の杏雲堂病院にいた。出版社のダイヤモンド社を経営していた石山は、事務室の窓口の前に立って入院の手続きをしていた。糖尿病を患っていたという。「いま、目前に起こった震動は、かつて経験したことのない大震動である。病院の建物が、横に倒れるのではないかと思うほどの大震動であった。」と記されている。続けて、「病院の人は、先を争って表へ逃げ出した。聴診器を手にしたまま顔を蒼白にして、表へ飛び出す白衣のお医者さんもあった。」と記している。だが、石山は逃げることもせず、窓口の前に立って周囲の風景を見ていたという。「私は、きわめて臆病の性質ではあるが、地震にだ

けは、度胸がいい。」といっている。周囲を見回しながらいかに処すべきかを考えた。「表へ飛び出した者が助かるか、うちに居残ったものが無事にすむか、こういう場合の運命は、はかり知れぬ。だが、病院の人は、みな表へ駆け出している。そういう場合に、自分一人屋内にがんばって、圧死でもすれば、もの笑いのタネになる。みんなと行動をとるにすべし。」と考え、ついに表へ出た。だが、「駆け出しはしなかった。ゆうゆうと歩いて表へ出た。」というのだから、少々変わり者というべきであろう。だが、出た途端に「道路をへだてた煉瓦塀の一角がくずれて、ドサリと落ちた」。そして、「表へ駆けだして一団をなしていた十数人の連中は、煉瓦塀のくずれるのに驚き、私の自動車にすがりついた。」と記されている。石山は病院入口の石門のわきに自動車を停めていた。「石門が折れれば、煉瓦塀以上に危険なのだが、避難者の一団は、そういうことを考慮するいとまがなかった。」と批判的に記している。震動が一段落すると再び事務所の窓口に行ったが、だれも戻っては来なかった。これでは入院の手続きもできない。会社の方も心配なのでひとまず病院をあとにした。病院はその後数時間で焼けたという。

石山は自動車に乗って、神田を通って宮城前に出た。「神田には、つぶれている家があった。宮城前の道路は割れていた。」と記されている。また、「日比谷公園にさしかかると、園内の松本楼が火を発している。震動が思いのほか、ひどかったのに驚いた。」と記されている。震が関にあった会社は建物も人も無事だったが、活字がひっくり返っていた。「木造二階建ての社屋の屋上に出て、四方を見渡すと、たつたいま日比谷公園だけだった火事が、四カ所にも、五カ所にも見られ、もうもうたる煙の中から、火炎をひらめかしている。」と記されている。今度は家族のことが気になり、自動車で大井にある自宅に向かった。「道行く人が、街道に充満して、自動車が通りにくい。ややもすれば、自動車が、人に突き当たるようなことになる。」と記しているが当然であろう。だが、何とか自動車に乗って家に辿り着くことができたというのだから驚きである。屋根瓦がなだれ落ち壁も崩れていたが、幸い家族は無事であった。そのまま家族の側についていたかったが、社長としての責任があるので会社に戻ることにした。

戻る途中、東京湾が見えるところに出た。「ちよどそのとき、湾の彼方から、

津波らしいのが、ひと寄せ、寄せてきた。幸いに、その勢いが、弱かったので、岸にぶつかってもなにとも起らずにすんだ。だが、「横浜沖には、かつて見たことのない恐ろしい黒雲が、うず巻いていた。」と記されている。四時ごろに会社に着いた。以前から非常時の備えとして掘っておいた穴蔵に重要書類を入れた。「九尺立方くらい」というからかなりの大きさである。通帳、小切手、印鑑等は自動車に積んでいつでも持ち出せるようにした。夜が更け、十二時近くになった頃である。いよいよ火が近づいて来た。重要書類を乗せた自動車には退去を命じ、石山は社に留まった。「私が、苦心をして建てた社屋である。焼けるのは、天災だから、ぜひないとしても、せめて焼けるところを見とどけて立ちのきたい。」と考えたのである。そのうちに、宮城方面から一台の蒸気ポンプ車が来て、虎ノ門で止まった。われわれを助けに来てくれたかと思っただけでそうではなかった。「消防自動車は、かけつけてきた目的は、わが社や、隣の乗合自動車の建物ではない。道一つへだてたお隣の貴・衆両院である。」「のみならず、近くに日比谷公園がある。日比谷公園は、避難民でいっぱいである。」「両院が焼ければ、公園の避難者にも危険がおよぶというので、指導者のだれかが、つごうして、蒸気ポンプを一台、差し向けてくれたのであった。」と述べている。むろん、何らかの根拠があったことではないのである。だが、そのおかげで結果的には社屋は焼けずに済んだのである。寝なければ明日がもたないと考え、最初は橋の上に寝たという。「黒雲のうず巻く、不気味な東京の空をながめて、橋の上にゴロリと寝たのである。」と記している。だが、まだ残暑があるとはいえ、夜風で風邪をひくのが心配になり社屋の二階に入って寝た。「それは、当時としては、いささか度胸のいることであつた。」と述べている。

夜が明けると社員がぼつぼつと出社して来た。まずは食料を調達しなければならぬ。前日にも米を買っておいたが、それでは足りない。あちこちを買ひあさつたが、四、五日分しか買うことができなかったというが、それでもましな方であつたであろう。翌々日あたりから、社屋に居候を申し込んでくる人がぼつぼつと出てきた。むろん承諾したが、こちらから申し出て来てもらった人もいたという。雑誌発刊に大きな力を貸してくれた米倉嘉兵衛という人物である。日比谷公園に

避難していると聞き、さっそく飛んで行った。すぐに見つかり、玄関わきの応接室を提供した。その後も、雨の日になると日比谷公園に行き、困っている人を見つけると社に連れて来た。心配なのは食料だが、震災の二、三日後には玄米一俵を持ってきてくれた人がいて助かったという。石山は何日も社で陣頭指揮を取っていたが、そのうちに「朝鮮人事件」が起きた。「京浜国道の町々を、横浜方面から、朝鮮人が襲撃する」ということであった。だが、「あとで調べると、それは、うそであった。」と記している。何日後かは記されていないが、さすがに家族が心配になり徒歩で自宅に帰った。「みちみち、震災の跡を見ながら、三田通りを抜けて品川に出、それから京浜国道を歩いた。」と記されている。二時間以上かかって大井の自宅に着いた。その日以降、往復五里の道を毎日歩いて通ったというから驚きである。

十日近くたつと、電車が動き出し自動車も運転ができるようになった。ちょうどその頃、山一証券社長の杉野嘉精がやって来た。震災時、伊香保に避暑に行っていた杉野が東京に戻ってみると、会社は丸焼けであった。事務所になる場所を貸してくれるところはないかというので、社の一室を提供することを申し出た。二、三日後に引越して来て、三ヶ月ばかりいた。その他、『中外商業』には印刷工場を貸したとも記されている。現在の『日本経済新聞』である。そんな頃のある日のこと、大杉栄の使いが来た。「金がなくて困る。一〇円ばかり貸してくれ。」というのである。石山は十円しか持ち合わせがなかったので、半分の五円をやったという。大杉とは「主義は、互いにあい入れぬ間から」であったが、「別懇の間がらであった」と述べている。震災には直接関係ないが、大杉とのエピソードを拾っておきたい。

大杉君は、よく私の社へきて、尾行の刑事をまいた。それは、赤坂山王下の社屋であった。その社屋は、表通りから裏通りまで、突き抜けになっている。大杉君は、表通りから、そそくさとはいつてきて、裏通りに抜け、どこかへ行ってしまう。

「今日は、ちょっときやつらについてこられては困るんだ。ちょっと頼むよ。」

と、あいさつをして、行くのであった。二、三時間すると、裏からわが社へ帰ってきて、表通りに出る。刑事が二人、わが社から、少し離れたところに待っている。大杉君が歩き出すと、見えがくれについて行く。

こんなことが二、三度あった。

堂々と自動車に乗ってきたこともある。当時は、まだ、容易に自動車に乗れない時代であった。

つねに、おカネのない大杉君が、自動車に乗ってきたんだから、ただごとではない。

「バカに景気がいいね。どうしたの。」ときくと、

「警察に、自動車を出させたんだよ。」

「警察が、どうして自動車を出したんだ。」

「うむ、明日、監獄入りをするんだ。ほうぼう、あいさつ回りをしなければならぬといったら、むこうが、自動車を出してくれたんだよ。」

といって、ケロリとしている。

それから十日あまりたち、大杉が殺されたことを知った。「理屈はどうあるにしても、私の感情は動いた。私の好きな大杉君がむごたらしい殺されたをしたと聞いて、私は、なんともいえぬさびしい気持になった。」と記されている。

ばらばらになった活字を整理して『ダイヤモンド日報』の号外を出したのは、九月六日であった。印刷は手刷りで行なった。だが、発行しても送り先がなく、電信柱に張り付けて世間に知らせたという。十一日から電力の供給がはじまり、その日から毎日発行した。さらに、二十一日には旬刊の『ダイヤモンド』を発行した。出来上がった雑誌を自動車に積み東京駅へ行くと、たちまち売り切れたといっている。

谷村貞治(注26)の自宅は外神田にあった。「役所から急ぎ帰って見ると既に焼野原に化していて、着のみのまま上野公園に逃れ、いわゆる流言蜚語に脅えながら夜を明かした。」と記されているので、地震発生時に自宅にはいなかったであろう。だが、「役所」にいたとも記されていない。要するに、地震発生時のこ

とについては何も記されていないので、一応ここで取り上げておきたい。谷村は大手町にある通信省の技手をしていた。「関東一帯が灰燼に帰したので、電信復旧の役所の仕事もどこから手をつけていいか分らないという極度の混乱です。火が消えると同時に一齐にバラック住宅の建設が始まって電気屋さんが引つ張り風になった。役所の仕事は中断されているので手を拱かねてぼんやりしているわけにも行かず、私は無論電気の方も心得ているので人助けにもなると早速インスタントの電気屋さんに早変わりしました。」と記されている。続けて、「手伝人を何人か集めて俄か商売に出勤したが、どこへ行つても「つけてくれ、つけてくれ」で、一灯二灯の工事で結構儲かる。」と記されているが、今日では考えられないであろう。公務員が混乱に乗じてアルバイトをしているのである。だが、「役所の仕事は中断されている」以上、「人助けにもなる」ことは確かで、非常時は臨機応変ともいえるであろう。資材をどこから調達してきたのかは記されていないが、そのうちに大きな仕事が無い込んできた。「吉原遊郭でも聞こえた角海老」からの注文である。仕事も済み代金をもらつて帰ろうとした時、遊んでいけと誘われた。断ることもできず、いざ勘定の段となりその高額に酔いもさめたという。「こつち持ちで落成祝いをしてやったようなもので、ホトケ心になったばかりに、俄か電気屋は忽ち元も子もなくして終わりました。」とややユーモラスに記している。

江原通子（注27）は東神田の自宅にいた。「文字通り猛暑の白昼、もうすぐ姉たちが学校から帰って来るだろうなと感じていた午前十一時五十八分、ぐらぐらつと来た揺れに、大戸の板戸がぱたん、ぱたんと落ちました。ぱたん、ぱたんと戸が落ちるたびに、家の中が、さつ、さつ、と暗くなりました。」と記している。もつとも、江原はまだ三歳の幼児であった。だが、「生まれて三年八ヶ月目にはじめて私がこの世の記憶をしかと今にとどめている、衝撃の一日一夜でありました。」と述べている。先に見た村上一郎に次ぐ年少の記憶である。ただ、「あの年の夏は暑かった——地面から吹き上げるような熱気だった」と、後年よく祖母や母が口にしたともいつているから、あとから植え付けられた記憶という側面は否定できないであろう。地震の際、家族みんな外に飛び出した模様だが、その辺のことが少々曖昧でよく分からない。よく分からないといえ、その後、両国橋を

渡つて本所被服廠跡に避難したというのだが、乗用車を先頭に九台のトラックを率いて移動したというのである。江原の家は油問屋を営んでおり、ガソリンも扱っていたという。「当時まだ珍しい配達用のトラックのほか、祖父と父との乗用車」もあつたといっているが、九台のトラックというのは驚きである。それならば、さぞかし多くの物を運び出せたかと思いきや、「持ち出したものは古薬罐一つ」と「本尊と過去帳」、それに大日如来の「一枚の絵像」に過ぎなかったというのである。トラックも避難させるということだったのかも知れないが、少々理解しづらい行動といわざるを得ない。

それはさておき、「広い廠内の片隅にやすんで様子を見るうちに、下町の誰も彼もが被服廠へ、被服廠へと蝟集して来」たので、今度は上野の山へ逃げることにした。「私たち一家はその数刻後には三万八千人のいのちを焼き尽くすことになる被服廠をあとに、上野に逃れたのでした。」と記している。しかし、そこにもまた後から後から人が押し寄せて来るので、山をあとにした。飯田橋の砲兵工廠のところまで来た時には夕暮れが迫っていたという。そこで、「父は全軍にストップを命じました。」とあるから、そこまで乗用車と九台のトラックで移動したのであろう。そこで祖母は、「杉並にはうちの菩提寺がある。お寺に逃げよう」といい、それに従うことになった。被服廠跡から上野の山へ、またそこから出ようと提案したのも祖母であつた。途中でたくさんの人から乗せてくれと懇願され、その数が五、六十人ばかりになったという。「途中牛込若松町あたりはすでに道の両側が焼け落ちていて、その間をフルスピードでつっ走った時、ばあやが身をこごめて守ってくれた私の頬にも余燼のほてりがぼーつと熱く迫ったことを覚えていきます」と記されている。一行は無事お寺に到着することができた。その夜の夜更け、ばあやが江原をねんねこで負ぶつて外に出たという。「たぶん寝つきの悪い私を寝つかせてくれるためだったのでしよう。」と推測し、「私はおぼあぬくい背の上で、寂寞とした夜更けに凄絶な光景を目の底に焼きつけました。それが私のこの世の確かな記憶のはじまりです。」と記している。

青木一男（注28）は大手町にある大蔵省にいた。大蔵事務官であつた青木は、二階の参事官室で書類の説明をしていた。「大震動とともに天井が落つこつてき

たので、突差の間に机の下にもぐって難を避けた。」と記している。続けて、「もうもうたる土煙りがたちこめて天日ために暗く、むせかえって呼吸もできないほどであった。激震の少し衰えるのをまつて屋外に飛び出した。」と記されている。だが、庁舎は幸いに倒壊せず、死者も出ずに済んだという。倒れた本箱などを整理して退庁し、徒歩で下宿先の本郷にある菊富士ホテルに帰った。「同宿の人たちと隣りの空き地にたむろして様子を見てみると夕方には市内各所に起った火災のため帝都は猛火猛煙に包まれました。夜になると、本郷台の直ぐ下の小石川砲兵工廠が燃え出し爆音の連続でもの凄い状景を現出した。」と記されている。また、「大蔵省も夕刻ごろ南隣りの内務省から燃え移った火のために類焼したのである。」とも記されている。

翌二日は日曜だったためであろう、三日になって役所に集まったが建物は一棟も残っていないかった。そこで、永田町にある大蔵大臣邸に赴き大臣の挨拶を伺ったという。大臣からは「震災地にモラトリアム（支払猶予令）を施きたいから至急準備せよ」という命令があった。即日原案を作り、協議ののち六日の枢密院本会議にかけ、九月七日付の勅令として公布されたと説明している。その詳しい内容、その後の影響や問題点などが詳細に記されているが割愛する。そのほかは、忘れがたい痛手として無二の親友を亡くしたこと、「路頭のすいとんやが繁昌した光景」、それに「鮮人問題にからまる流言蜚語」について付随的に記されている。青木得三（注29）も同じく大手町にある大蔵省にいた。やはり大蔵省に勤めていた青木は、国際課長室で報知新聞の担当記者と話をしていた。「十一時五十分突如として猛烈な地震が起った。私の坐席の後ろの本棚が崩れ落ちた。私は後頭を打たれる処であったが、坐席を離れていたので事なきを得た。」と記している。記者が去ったあとに窓から外へ飛び出したといっているが、なぜ記者とともに出て行かなかったのかよく分からない。大蔵省別館の玄関から国債課の部屋へ行く時、「書類棚は悉く床上に崩れ落ちて、全く手のつけられぬ状態であった」。青木は、「国債課員に明後日（その日は土曜日であった）来て片付ける、皆自宅が心配だろうから帰りなさい。」といって帰したという。青木一男の場合と同様、日曜日は何があっても休みなのである。こちらの青木はそれから赤坂見附まである人

の自動車に乗せてもらい、それから徒歩で千駄ヶ谷の自宅に向かった。幸い家は無事であった。家には男児と女中二人がいたが、妻と女兒は小田原の妻の実家に行っていた。女兒が百日咳に罹っていたからである。四日、妻の実家から継母と異母妹が死亡したとの通知があった。妻子のことは何もいってこないから無事だと思い、両親のいる鎌倉へ行ってみることにした。七日、千駄ヶ谷から徒歩で芝浦まで行き、海軍の駆逐艦に乗せてもらい横須賀に上陸し、それから徒歩で鎌倉に向かった。家は潰れていたが、父母と妹は無事であった。

村松道彌（注30）は丸の内にある丸ビルにいた。丸之内新聞に勤めていた村松は、八階にある社で辞表を書いていたという。仕事は面白かったが、社長が優柔不断で嫌気がさしていたからだといっている。「ぐらぐらと揺れ出した。その内に天井の電気の笠は落ちて来る、立っている人はよろけて坐ってしまう、私は幸い椅子に坐っていたので、机にしがみついて、何度かの大きな揺れを耐えていたが、そのうち窓から表を見ると、東京駅の屋根の上の遠方の京橋方面の街並に、ほこりがもうもうと煙の様子上っている。下を見ると丸ビル前の東京駅と中央郵便局に囲まれている広場に次々と人々が避難し、また怪我人もかたづけ出されている。」と記されている。このままではいけないと思い、大きな揺れがおさまるや否や避難した。エレベーターは止まっているので階段で下へ下へと降りて行った。「各階の人々が皆この階段に集まり、その間余震がある中を下って行ったのだが、ここで倒れでもしたら、人に踏みつけられて命が無い、それまでだと思いい足を踏みしめてやっと一階にたどりつき、アーケードから明るい外光を見た時、ホッとして、これで助かったと一気に表へ飛び出した。」と記している。丸ビルには、実は四隅に非常階段があったのだが、「あわてるとそこに気がつかないで、いつも使っている階段の方へと皆の足は向くものだ。」と述べていた。振り返って丸ビルを見ると、「五階辺にずっとひびがはいっているが大丈夫だった」。しばらくして近所の様子を見ようとビルの裏に行くと、「新築中の鉄筋コンクリートのビルがみごとにくずれてい」た。それから丸ビル前の広場に戻り、他の社員とも相談してお互い家に帰ることにした。家は神田須田町にある。常盤橋を渡り日本橋室町辺りに来ると、出版社の博文館が燃えていた。村松は友人宅の土

蔵造りの店の二階に間借りをしていたが、部屋はべしやんに潰れていた。木造りの友人宅は無事だったのでそちらにいと、「夕方になるに従って四方の火の手は納まるどころでなく、ますます盛んになり、段々と迫ってきた」。これも危ないと思い、「友人のタンスなどを万世橋のガード下へ運び出したが、ますます火の手は近づきつつある。幸い上野方面の道が大丈夫だったので、上野公園に避難することにした。さしあたり必要な蒲団を背負い、鍋釜をさげて上野の山に避難し、その夜はそこで明かした。

翌日になつても火の手は広がってくるので、谷中の友人宅に行った。だが、そこも安心できず、「二日目の晩は日暮里の踏切りの線路の上で夜を明かし、三日目は友人と別れて、巢鴨の別の友人の家へ私一人で行」き、そこで二、三日休んでいたという。やがて、日本橋にいる姉のことが気になり訪ねて行った。「姉一家は麻布の本宅の方へ行つたというので、そこへ行き、一同無事を喜び、一晩明かした。」と記されている。だが、このまま東京に留まつても仕方がないと思ひ、郷里の静岡に帰ることにした。汽車は不通だが、芝浦から清水まで避難民無料の汽船があり、また清水から先は汽車が動いているとのことであつた。船が満員で一日待ち、翌日の汽船に乗り、静岡の兄の家に無事辿りつくことができたという。

内田信也（注31）は丸の内にある内田商事会社にいた。船会社を経営していた内田は、社員と昼飯を食べる約束をしていた。「これから出掛けようというところへグラ／＼と来たものだ。」という記述のほか、地震発生時の記述はない。自宅は無事で、そのため多くの罹災者が押し寄せて来たという。「そうした中で僕は市中を一巡してみると、あちらこちらの橋際などに、変死人がそのまゝ曝されているのに胸をつかれた。」と記している。「こんな有様では人心の荒廃はとうてい避けられまい」と感じた内田は、親交のあつた僧侶に応援を求め現場を回向して歩いた。そうして日がたつうちに、本所被服廠跡で数万の人が焼死したことが判明した。「九月四日だつたと思うが、現場に行つてみると、異臭鼻をつく余燼の中に立つて、一人の若僧が一心不乱に読経を捧げている。その気高い姿に胸をうたれ」と述べている。自分も何とかしなければならぬと思ひ、上野寛永寺の

住職に相談し、各宗派の代表を集めて協議した。その結果、陸軍から天幕を借りて被服廠跡に建て、そこで各宗派が毎日交替で回向することになったという。「これが後日震災記念堂の濫觴となつたものである。」と記されている。

沢田正二郎（注32）は有楽町にある警視庁にいた。八月二十九日、賭博の容疑で検挙された沢田は、九月一日の朝に「〇〇署」から警視庁に身柄を移された。次に見る島田正吾によれば、「〇〇署」とは浅草の象潟警察署である。「手首々々には、舞台での他はうけたことのない冷たい手錠をはめられ、手錠と手錠とは黒色の捕縄さへが繋がれて」、車に乗り込んだ。「娑婆の見えない鎧屏の自動車は、十二三人もの我が座員を身動きもならないほどに詰め込んだまゝ、都大路を疾駆して」行つた。沢田は新国劇という劇団の座長をしていた。着いたのは警視庁の裏門で、そのまま地下室の調所に連れていかれたという。

四十七名の座員が、一々写真を撮られて再び調所に戻つて来た恰度その時であつた。何を怒つてか、地殻の一角は、云ひ知れぬ凄惨い物音と共に地上のあらゆるものを震り倒さんとしたのであつた。私は、何の予告もなく不意に生じたこの一ト震ぎに危くも横倒しに打ち倒れようとしたのであつたが、わづかに支えて付つことが出来た時、その側には四十六名の座員が一斉に寄り集まつてゐた。手にはまだ例の手錠をかけられたまゝの身の、走ることも、逃げることもならず、危険なあの地下室の片隅に蹲くまつたのであつた。

沢田は、「死なば諸共だ、狼狽してはならんぞ」と座員を励ました。そして、「天よ！ 暫し我に生を与へ給い！」「彼正しかりしとの一言を云はしめ給へ！」と一心に祈つたという。その後大きな第二震が来た。「私を中心とした欒ひはこれにも動せずして蹲くまつてゐた。檻窓一重の外の世界は、修羅場のやうな騒ぎである。けれども私たちは、静かに黙して、たゞこの願ひにのみ生きてゐたのであつた。」と記されている。しばらくして、沢田らは帝国劇場の横の広場に避難させられた。「嘗ては、この白聖の中で幾千の観客を前に、拍手に迎へられながらステージに立つたこともあるのに、哀れや今は、鉄の鎖につながれて、南側入口前の

三和土の上に蹲くまつてゐなければならぬとは、あゝ何たる運命の皮肉であらう。」とその時の気持ちを記している。やがて警視庁は焼け落ち、そこにも火の粉が降りかかってきたので、次に宮城前の広場に連れて行かれた。「広場の前の松の木の下に、四十七名珠数つなぎになつたまゝ、一人が小便をしたいと云へば、已むを得ず全部がそれに付き合はなければならぬといつたやうな有様」であつたと記している。続けて、「見あぐると大空は千年古を経しきそりが巢くつてゐたと思はれる穴ぐらの壁のやうに恐ろしい色を呈してゐる。」と記されていた。大蔵省が焼け、神田や芝、京橋や日本橋あたりも焼けているのが見える。そして、帝劇も焼けていた。「帝劇の焼けてゐるのが見える。学生時代に、三等切符を買ひながら見つめてゐたあの屋上の翁の像が、今まで善美を誇つてゐた帝劇の運命を負うてゐるかの如くに、気の毒にも見てゐる間に倒れ落ちてしまつた。」とやや叙情的に記している。

午後四時近くになつて、「明日午後五時までには復び集まつて出頭」するといふ約束で全員が一時釈放となつた。非常時とはいへ、異例の事であろう。まずは食料を求めたが、なかなか手に入らなかつた。四十七名といふ人数であつたからなおさらであろう。食料を求めながら、「車に重い荷を積んで苦しんでゐる人を見てはそれを手伝つてやり、道端に倒れてゐる力弱い婦女子のあるのを見てはこれをいたはり救けながら」歩き続けたという。日本橋本石町あたりにやつて来た時、猛火に見舞われた。「烈風に煽られた猛火は宛ら私たちを襲うて来るかのやうである。裏の細道を駈ける人、も一度震れたらきつと崩れ落ちるにちがひないやうな危険な屋根、しかも焰に吹きつけられて燃えしきつてゐるその軒下を走つてゆく人、さうした焰のガードをくぐり抜け、喉が乾けば消防のホースにかけたり泥水を口に医したり、路傍に落ちころがつてゐる角砂糖を見つけてかぢつたりしながら」、神田須田町の方へ走つて行つた。そこから一行は浅草方面へ向かう。「赤黒く焦げた、未だに忘ることの出来ない異様の天の色よ！この恐ろしい姿の幕は、はや夜の帳に掩はれんとしてゐる。あらゆる電光は滅してもなほ、燃え広がる火光によつて路面は昼のやうな明るさである。」と、再び叙情的に記されている。その赤い光の中で、奇跡的に一人の座員に出くわした。「私の家の

安否を私に知らしむべく、すぐ警視庁まで駈けつけて呉れたけれども果実さず、今し空しく雷門まで引き返して来たといふ」人物であつた。沢田はそこで家族の無事を知つたのである。新たな座員を加えた一行は何とか公園劇場までたどり着く。検査される二十九日まで公演をしていた劇場である。しかし、そこにもまた火の手が迫つて来たので上野の山に向かつた。

漸く上野台に辿りついて振りかへれば、まづ胸をつまらせるものは下町一帯の火焰である。しかもその火の色たるや、大自然の莊嚴さなどといふ言葉とは全然かけはなれた心憎い物凄さを帯びてゐるではないか。

火！ 火！ 火の海！ 満目みな火の海！ むかし住むだ山の下の御徒士町も、稲荷町も、初恋の思ひ出残るどんく、橋の附近も、芝居の閉場後、軽い疲労を覚えながら涼しい夜風に吹かれて歩いた浅草の通りも、何もかも、火と煙とに包まれてしまつて、私に救ひを求め叫んでゐるかのやうな気がする。懐しい記憶の跡々が、斯うしてみんな灰になるのかと思へば私はそれが悲しい。

上野の山は避難民であふれていたためであろうか、理由は記されていないが行はそれから本郷方面に向かい、第一高等学校の前の道路で一夜を過ごした。

翌二日の夜が明けた。午後五時までに出頭の約束を控えていたが、みなそれぞれ家族を探しに行くことにした。沢田は数名の座員を連れて向島に向け歩き出した。「崩れた家と焼け落ちた家とのみで、満目を遮るものは、煙の外に何物もない」焼け野原を東へ東へと進んだ。鐘ヶ淵紡績付近まで来た時、群衆の中に家族を連れ見つけたという。家は昨日の夕方に焼け落ちたということだったので、家族を連れて今来た道を引き返し、本郷へと向かつた。だが、そこもまた火の手が迫りつゝあつた。折しも、警視庁に交渉に行つてくれた座員が、出頭には及ばずとの報告をもたらししてくれた。一行はそれから北へ北へと進み小石川まで行き、その夜は空き地で過ごした。

三日のことは、「もとむべき食のために、比較的無事だつたといふ山の手を駈け廻り、或は知己の家を訪れて得て来た少ばかりの米を糧に、百名に余る座員

たちの命がつながれてゆくのである。」という記述があるだけである。はじめ四十七名であった一行は、浅草で新たな座員が加わり、またその後家族も加わって百名ほどになっていたのである。四日目になって、沢田は足の傷に痛みを覚え一歩も動けなくなったという。どこで傷を負ったのかは記されていない。だが、先輩や友人たちが大いに助けてくれたといっている。「片腕を病の為になくした友だちは、その情の賜物を乳母車にいっぱい積んで来て呉れた。同じ罹災者であるのに拘らず、数十金を恵んで呉れた老劇作家、衣類その他の日用品を寄贈して呉れた流行作家、私たちは、この人々の恵みの美しさを涙なしに受けることは出来なかつた。」と記している。「野営の幾日かの間には、不安の余震や、雨の日や風の夜がつづいた。」とあるから、二日からはじまった野宿を続けていたのであろう。

六日になって、一行は最初の日に一夜を過ごした一高前に引き返した。「秋の朗かな日がつづいて帝都の焼跡には早くも復興気分が漲つて来た。人はバラツクを建てて自己の職業にいそむべく急ぎ出した。」と記されている。それからのは、自宅の煉瓦塀が交通の邪魔になつているとの知らせを聞き、座員に手伝ってもらい煉瓦運びをしたこと以外には記されていない。ただ、十月になり、十七日から三日間にわたり野外劇を行なつたことが記され終わっている。なお、沢田の自伝が刊行されたのは一九二四年、震災の翌年である。本稿においては震災後最も早く書かれた、したがって最も古い自伝になる。ちなみに、四年後の一九二八年には改訂版（柳蛙書房）が出されている。一部を削除し、新たな部分加わっているが、震災に関する記述はいずれにも載っている。

島田正吾（注³³）も有楽町にある警視庁にいた。新国劇の座員であつた島田は、沢田正二郎らとともに、九月一日に浅草の象潟署から警視庁に身柄を移された。時間は朝の十時頃、「関東大震災が起くる二時間ほど前だつた。」といっている。「ぼくたちは数珠つなぎのまま四人用の護送車に乗せられて運ばれた」。「ぼくが未成年者の顔写真を写され、指紋をとられている最中にグラグラッと来た。」と記されている。島田はまだ十七歳の青年であつた。続けて、「やがて間断なく続く余震に、ひと先ずぼくらは縄つきのまま警視庁から宮城前の広場に避難させられた。その芝生の上に足を伸ばし、帝劇の屋上にある三番叟の翁の彫刻が煙りに

まかれていくのを暢んびりと見物した。時折り、東京じゅうの四辺からボンボンと爆発音がきこえたが、案外平気だつた。」と記されている。沢田がいつていた、帝国劇場横の広場への避難については述べていないが、宮城前広場への避難は一致している。一致しているといえば、いわゆる「連れ小便」についても述べている。「いま思い出してもおかしかったのは、連れ小便である。一人が「お願いします」と許可をとって用に立つと、数珠つなぎの一同もやむなく一緒につき合わなければならぬ。これがほんとの関東の連れ小便だと思つた。」と記されていた。「関東の連れ小便」とは、豊臣秀吉と徳川家康に関する逸話を指していることはいままでもない。夕方になり全員が釈放され、その後浅草の公園劇場へ行き、それから上野へ行つた。そこまでは沢田と一致する。沢田はその後本郷方面へ向かい一高前で夜を明かしたといつていたが、その夜は上野で野宿したと島田はいつていない。「夜中に朝鮮人が押しかけてくるというデマが飛んだりして眠るどころではなく、朱鞘の大刀を腰にさして指揮する沢田先生に従つて、ぼくたちも自警に当たつた。」と記されている。

正力松太郎（注³⁴）も同じく有楽町の警視庁にいた。だが、沢田や島田のような容疑者としてではない。警視庁の官房主事としてである。正力は監房主事室で来客と対談中であつた。「大地震が襲来するや庁員は何れも中庭に飛び出し」、隣室の庁員が部屋に飛び込んで来て「早く出ませんか」と誘われたが、「私に構わず早く出給え」といつて部屋を出なかつた。その理由は、「警視庁庁舎は煉瓦造りで非常な大動揺をしましたから私は部屋を出ても三階から庭に出るまでには庁舎が倒壊するものと思ひまして、途中で死ぬよりもむしろ自分の部屋で死んだ方がよい」と思つたからだと説明している。地震の間は立つて机に手をかけたまま天井を見ていたという。地震が止むや否や、「直ちに窓から外を見ましたところ警視庁の後隣の一色活版所をはじめ二、三ヶ所は既に火を發しておるのを見ましたから、これは大変である、市内各所に火を發しておるのを見ましたから、これは急ぎ部屋を出ました」と記されている。だが、三階にも二階にもはやおらず、庭に出ようとした時に一人の庁員に遇つた。その人は、官舎にいる家族は無事であり、これから京橋の親戚の家に避難するところだと告げたというが、

なぜそれほど早くそのような情報を得たのかいささか疑問である。それを聞いた正力は、市内は危険だと考え郊外の友人宅に避難せよと命じたといっているが、それをどのように伝えたのかは記されていない。なお、その頃には庁在員は極めて少数であったと述べている。「家族の身を案じて自宅へ帰つたものが少なかつたからでありまして、中には警部の身で郷里まで帰つた者さえあつたくらいであります。」と説明している。続けて、「居合わせた少数の人員をもつて防火に従事しましたが警視庁庁舎は風下にありましたため木造の厩舎は間もなく燃え、午後一時過ぎ早くも本館に火が移りまして重要書類だけを運び出した次第であります。」と記されている。

午後二時頃、警視庁は日比谷公園内の第一中学校校舎を仮庁舎とした。午後四時頃、家族を避難させていた友人が来て、官舎にも火が移りかけているから荷物を運んだ方がいいと忠告し、貨物自動車があるからそれを使えといった。だが、「これは徴発したものであるから私用に供する訳にはいかぬ、この際自己の私財などに構つておられない」といつて断つたという。しかし、後で知つたことだが、友人は自家用車でひそかに家財を運んでくれたとのことである。「私共警視庁員の一部は何れも数日間いわゆる不眠不休で服装を解くこともなく救護、警戒の任に當つておりました。」と記されている。五日目か六日目に件の友人が再びやって来て、ちよつとでもよいから帰宅してはどうかと勧められ、夜の十二時頃に友人宅に行った。一日以来の再会であった。だが、警務課長は十一日目で自宅に帰り、警視総監は二十日あまりも自宅には帰れなかつたといっている。「朝鮮人来襲騒ぎ」についても詳しく記されている。

朝鮮人来襲の虚報には警視庁も失敗しました。大地震の大災害で人心が非常に不安に陥り、いわゆる疑心暗鬼を生じまして一日夜ごろから朝鮮人が不穏の計画をしておるとの風評が伝えられ淀橋、中野、寺島などの各警察署から朝鮮人の爆弾計画せるものまたは井戸に毒薬を投入せるものを検拏せりと報告し二、三時間後には何れも確証なしと報告しましたが、二日午後二時ごろ富坂警察署からまたもや不穏朝鮮人検拏の報告がありましたから念のため私自身が直接

取調べたいと考え直ちに同署に赴きました。

私は署長と共に取調べましたが犯罪事実はだんだん疑しくなりました。折から警視庁より不逞鮮人の一団が神奈川県川崎方面より来襲しつゝあるから至急帰庁せよとの伝令が来まして急ぎ帰りますれば警視庁前は物々しく警戒線を張つておりましたので、私はさては朝鮮人騒ぎは事実であるかと信ずるに至りました。

その後、不逞鮮人は六郷川を越えあるいは蒲田付近にまで来襲せりなどとの報告が大森警察署や品川警察署から頻々と来まして東京市内は警戒に大騒ぎで人心恟々としておりました。しかるに鮮人がその後なかなか東京へ来襲しないので不思議に思つておるうち漸く夜の十時ごろに至つてその来襲は虚報なることが判明いたしました。

石井桂（注35）もまた有楽町の警視庁にいた。その年東京帝国大学を卒業した石井は、警視庁建築課に入ったばかりであった。地震発生時のことについては記されていない。石井は上司の許可をもらつて本所にある自宅に向かつた。だが、「家路に急ぐ先々は、地震と同時に発した百箇所余りの火災のため、行く道を焰に追われ追われて自宅迄は到着せぬ内に身は危険に迫られ」た。そこで石井は陸軍被服廠跡に飛び込んでしまつたという。凄惨な現場となつた被服廠跡にいた人物の証言なので、少々長くなるが見ておきたい。

中には既に四万四千の被難民が充満し雑踏を呈していた。多くの人々は包一つ位持つていたようだが、中には手車に家財を満載して来たもの、馬力を引込んでいたものもあるようで唯人が集まっていることのみが頼みの綱のようであった。私が被服廠に飛込んで数分後、かなり真近く迄迫つた火災は猛威を逞しくしました。熱い猛烈な風と共に丸太とか焼トタンとか大きな火の塊が遠慮なく被難民の頭上に落下して、其処此処に悲鳴が起つた。多分大怪我をしたこ

とだろう。すると突如として突風に見舞われた私は三尺ばかりの小高い所から何間か吹飛ばされて、深さ一尺ばかりの水溜りに落ち込んだ。吹飛ばされて倒れた所には既に大勢の人々が横になって水に浸っていたようであった。自分の上にも更に幾人かの人が吹飛ばされて重なった。結局水浸しになった人の上に自分が落ち込んで更に他の人々が上に重なり水浸しになったまま辛じて首だけ出していたのである。火焰は間断なく頭上を舐める。恐らく石原町の電車の向い側からくる火焰で長さ数十米もあるうか。或時は真暗に、或時は真紅に、非常な烈風と共に頭上を通過する。重なり合った人々は自分の体が思うように動かせない。赤い焰が通るときは胸の中迄焼けるようで文字通り熱苦しい。上の人々の衣服等についた火はお互いもみ消し合い水をかけたようだ。いくら我慢しても益々腹の底まで熱風が浸み込んで呼吸困難となる。

苦しみのなか、遠くの方から「南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華經、アーメン等」の祈る声が聞こえ、子供の泣きわめく声や男の怒号の声などが入り乱れる。そのうちにそのような声も聞こえなくなり、「唯物の焼ける音、爆音さては真近に人体の焼ける音だろう、じいじいという音さえ」聞こえてきた。そのうちに石井は気絶してしまった。気がついたのは翌日の明け方近い頃であったという。「寝たままあたりを見廻すと何も見えず、唯自分の上に幾人かの人が死んでいるようであり、自分の下にも幾人かの人が死んでいるようでもある。上の人は焼死し、下の人は僅か一尺の水溜りで溺れて死んでいる。自分だけがその場所で助かったと思うと涙が流れて仕方がなかった。」と記されている。身動きができず大声で助けを求めていると、誰かが引きずり出してくれた。「そこに立った私は遠くの方に赤々と火事が延焼していく有様を見た。どこか近くの鉄骨が真赤に焼けて美しい。」「日は漸く上って初めて見た惨状に再び失心せんばかりに驚いた。」と記している。その惨状は、「衣服が焼けて帯だけ残っている。口に赤い風船をくわえていると思ったのは舌だったり、焼けただれて穴だけ残っているのは口だったり、身じまいも美しい娘が少しも取り乱さず人形のように死んでいたたり、三人の小さい子供を腹の下にしっかりと抱いた若い母親の姿等、どれを見ても涙、涙、涙

である。」と記されている。石井は、「そばで死んだ人々の油が眼にしみて、しっかり開かぬ眼を、どうかして開けようと漸く消火栓を捜し出して目を洗った」。その時、隣家の人に出会い、家族もこの被服廠跡に逃げ込んだことを知り、腰が抜けて歩くことができなくなったという。

五日の夜、埼玉の故郷に辿り着き、はじめて父親と妹の二人が助かったことを知った。母親と弟と妹の三人は消息不明であった。父親と二人であちことを訪ね回ったが、再び会えることはなかった。「誰かの御骨を三人分載って厚く葬ったのは後聞に属する。」と記している。三人はおそらく被服廠跡で亡くなったのであろう。

小野賢一郎（注36）は有楽町にある東京日日新聞社にいた。記者であった小野は自室にいた。「グラ／＼と来ると同時に、高さ一丈余の書棚が倒れんとした、それを他の棚で支へさせて暫く室にゐた。その時にふと念頭をかすめ去つたのは工場の運命であつた。グラ／＼揺れつゞける中をいつてみると、ケース台は倒れ到底印刷は出来さうもなかつた。」と記している。新聞が発行不能と知ると、社員らは洋服の上に印絆纏を着、ボール紙でメガホンを急造し自動車で街頭へ向かった。メガホンでニュースを伝えるためである。「火の手に追はれながらも私共のメガホン隊は四方八方に飛び出して、惨状を報じ、火の手の進んで来るところを群衆に向かつて伝へた。」「恐ろしさまぎれに飛出したものゝ、自分の家は焼けたかどうか知らない人のために、私共のメガホン隊は非常な感動を以て迎へられた、動きのとれない程多くの罹災者が自動車へ鈴なりになつて情報を求めた。」と記されている。ただ、いつのことかは記されていないが、工場員たちがバラバラになつた活字を拾い、号外を手刷りで出したともいつている。そして、「震災記念の中で最も尊いものとして保存されてゐるがこの号外の如きは千古に残されて然るべきものと思ふ。」と振り返っている。

一度社に戻ると、有楽町の一角が燃えつつあつた。小野らは再び街へ出る。「一度は上野不忍池畔で自動車が動けなくなり、一度は江戸川附近で動けなくなり、または神田川近くで火の手に囲まれて身動きの出来ない苦しい場合が多かつた。」と記している。小野らはへとへとになつて再び社に戻った。家族のことが心配だつ

たが、偶然家に立ち寄った知人が社を訪ねて来てくれて無事を知った。夜になっても余震に脅えつつ社の警戒に当たった。「警視庁を焼いた火が本社に迫ってくる、木造の工場に何度も火がついたのを辛うじて消止めつゝ夜を明かした。」と記している。さらには、「屋上庭園に出てみると、まるで印度洋を航海する如く、さしもの大建築もグラ／＼揺れる、銀座方面一帯は火の海、近くは有楽町新橋間の鉄道の枕木が燃えつゝある、火はもう日日新聞の周囲を取囲んだ、私は屋上庭園に上り、または隣の警視庁官舎の方に出されてある椅子の上に、うと／＼して夢うつゝの如く、あか／＼と火焰に照らされ乍ら一夜を明かしたのであった。」と記されている。

二日もへとへとなりながらメガホン隊は街頭に出た。合間を縫って一度家に帰り、火が来た時の立退き先をいつけて社に戻った。メガホン隊は三日、四日と活動したという。「記者生活の第一線から事業課の謂はゞ第二線ともいふべきところにゐた私達は、今や口を以てニュースを伝える——といふ第一線に立つて活動することがうれしかった。」と記されている。

鈴木茂三郎(注37)もまた有楽町の東京日日新聞社にいた。同じく記者であった鈴木は編集局で原稿を書いていた。「スワツ」と屋上に駆け上って、丸の内一帯の家屋が倒れて砂煙りのあがる状態や、遠く又近くに火の手のあがるのを一望のうちに見た。」と記しているが、地震発生時の記述はそれだけである。活字ケースが滅茶苦茶になり発行が不可能になったこと、他の産業と同様新聞社の被害が大きかったことなども記されているが、鈴木にとって重大な問題はそのことではなかったという。重大なのは、「労働者の職場と生活が破壊した」と「多くの同志が朝鮮の人たちと一緒に拘置され、また惨殺された」ということであった。「私は数日間は出社しないで、毎日々々罐詰の袋を背負って焼跡を同志の消息を確かめるために歩いた。同志の居所が判ると罐詰を一つ二つ置いて次へ廻った。」と記している。「南葛事件」と「大杉事件」についても触れているが、前者については簡単な概要が記され、後者についてはほぼ内田魯庵の「甘粕対大杉事件」が引用されるだけで終わっている。

青木均一(注38)は有楽町の路上にいた。青木は前年に東京商科大学を卒業し、

東京毛織に入社した。有楽町駅のガード下をくぐった時であった。「瞬間なにとぞど思っただけで、地震という連想はつかなかった。すぐ道路の真中に飛び出して、同行の友人にくるようにながしたが、彼は両手を広げて泳ぐような格好をしたが、なかなか私の近くにこれなかった。地面は波をうち、そこから丸の内へんをながめたときには、両側のビルディングがいまにも相うつかと思つた。」と記している。続けて、「目の前の有楽町のプラットホームの屋根が大きな音をたてて倒れ、電車を待っていた数十のお客は線路に飛びおりた。有楽町駅のすぐ近くのふる屋がつぶれて、土煙がモウモウと上にあがった。ガードの横に、煉瓦(れんが)造りの変電所があつたが、これがグラグラとくずれ、そのくずれた煉瓦の中から血だらけの男が飛びだしてきた。これみな一瞬の出来ごとである。このとき、ようやく大地震だということが自分にもわかつた。」と記されている。東京毛織の建物はそこから見えたという。木造四階で古い建物であり、今にも潰れるかと見ていたが倒壊をまぬがれた。間もなくあちこちに火災が起きた。消防ポンプが駆けつけたが消火栓がだめで手のつけようがなかつたといっている。二時過ぎ、赤坂にある下宿に向かつたが、途中下宿あたりは焼け落ちたと分かつたので、そのまま青山の友人宅に行ったという。最後に、「震災当時、大井工場の倉庫のなかには、毛布の製品の貯蔵がたくさんあつた。これをいっぺんに売り出して金に代えた。十日くらいたつと、会社幹部もぼつぼつ集まつてきたので、仕事も正常化していった。」と記され終わっている。

犬丸徹三(注39)は内幸町にある帝国ホテルにいた。九月一日は帝国ホテル新館落成の日であつた。支配人であつた犬丸は、開館披露宴の準備に忙殺されていた。正午少し前に責任者を支配人室に集め、最終の打ち合わせを終えた直後である。「私は何か異様な鈍い地鳴りの如き物音を耳にしたと思つた途端、足もとから突き上げてくる激動を全身に感じた。」「はげしい地震である。大地が大揺れに揺れ、建物は突き上げられ、突き下げられ、前後左右に揺れる。」と記されている。犬丸は、三人の部下とともに「壁に両手を支えて、辛うじて起立していた」。最初の震動が終わると、真先に料理場へ駆けつけた。「まったく無意識の行動であつたが、その時、私の脳裡には、料理場には常に火があるのだという考えが潜在的

にひらめいたのだと思う。」とふり返っている。ところが、料理人たちは全員逃げ出したらしく誰一人見当たらない。電気炉は赤々と燃え、その上には油を入れた大鍋が放置してある。しかも、周囲の床にはこぼれた油滴に火がつき小さな炎があがっていた。すぐさま踏み消すとともに大声で「誰かいなか」と叫ぶと、調理台の下から三人の菓子職人が這い出してきた。彼らに鍋の処理を命じ、次に壁にある電気のスィッチに飛びついた。電気炉を消すためである。だが、スィッチを切っても電流は切れなかった。とつさに変電室に走り、電気技師にメイン・スィッチを切るように指示した。そうして電気炉は消えたが、当然ながら館内の電灯も一斉に消えてしまった。

薄暗くなつた館内から外に出ると、「向かい側の東京電燈本社が早くも火災を起こしたらしく、窓から濛々たる黒煙が噴出している」。人を呼んで火を消すように命じたが、消火栓にホースをつないだが水が出ないとのことであつた。もはや傍観するしかなかった。やがて東京電灯からの火の粉がホテルの方に飛来しはじめたので、「窓のシャッターをすべて閉鎖させた」。すでに消灯している上にシャッターを閉じたので館内は真暗であつた。だが、シャッターを閉じただけではすまなかつた。「晩夏のこととて、窓々には布製の日除けが取りつけてあつて、「やがて、これに火の粉が舞い落ち、点々とくすぶり、炎を上げ始め」たのである。「火の粉は屋上にも無数に落下する。破損したガラス窓からは容赦なく黒煙が入る。しかし、水が出ないため消火は思うに任せない。たつき消し、踏み消すだけである。」と記されている。犬丸は従業員に、「水がなければ、身体で火の粉を防げ。どんなことがあつても、この建物を燃やしてはいけない。命がけで守るんだ」と叱咤した。「これに呼応して、誰彼が競つて屋根によじ登り、シートを裂いて紐とし、これにバケツを吊して、汲みおきの水を入れ、リレー式に運んで、屋上に振りかかる火の粉を消すことに努力した結果、これはひとまず終熄した。」と記されている。しかし、今度は道一筋を隔てた愛国生命のビルが煙を噴きはじめた。一難去つてまた一難。犬丸は愛国生命ビルを指して、「あの窓を閉めろ。なかの火を消せ」と叫んだ。たちまち何人かがビルへ走り、火を消し窓を閉じて帰つて来たという。だが、次第に強風がつのり、「愛国生命ビルは、ふたたび飛び火

を受け、危殆に瀕した」。そこで、「宿泊客全員の協力を得て、水を運び、しきりに窓に打ちかけたところ、これが効を奏して、この建物は炎上することなく、その形を全うし得た」といつている。宿泊客に対しては宿泊費を無料とし、さらに避難者をも宿泊させ同様の扱いとした。食事はシチューのような簡単なものを提供し、焼け出された人には炊き出しを行なつたことも記されている。その夜は一睡もできなかったというのもつともである。

明けて二日。「火勢は依然猛烈で、内幸町一帯でも、多くの建物が順次焼け落ちて行く」。午前五時過ぎ、睡眠不足の体で新館の表玄関へ出て見ると、日比谷公園の向こうの米国大使館から大倉邸あたりにかけて盛んに黒煙が上がっている。大倉邸も焼けているのではないかと思ひ急いで向かった。憂慮した通り大倉邸はすでに全焼していた。「大倉男爵が浴衣一枚の姿に、手ぬぐいで頬かぶりして、冷飯草履を突っかけたまま佇立し」ていたという。大倉喜八郎もいまだ健在であつたが、ここでいう「男爵」とは息子の喜七郎のことであろう。喜七郎は帝國ホテルの会長であつた。犬丸は男爵を連れてホテルへ帰つたといつているが、家族については一切触れられていない。火災がほぼ終熄したのは三日に入つてからであつたという。「日比谷付近一帯の地は、ただ見る一面茫々の焼野原となつて余燼諸所に立ち昇り、その間を着のままで焼け出された避難者の群が踰跟として右往左往する有様は、まことに筆舌に尽し難き惨状であつた。」と記している。

ホテルは旧館がほぼ倒壊したが、新館はガラス窓が数枚破損しただけであつた。「满目荒涼たる焦土の帝都に巍然たる姿を見せて聳え経っていた。」と誇らしげに記しているが、犬丸はそれを有効に活用したいと考えた。そこで、東京日日新聞、電報通信をはじめその他新聞通信各社にロビーの一隅や客室を提供した。また、英、仏、米、伊などの各国駐日大使館、さらに王子製紙、東京電灯、大倉組、日本土木、大倉商事、高田商会などにも提供したという。ある日駐日米大使が来て、間もなく故国から食料を満載した軍艦が到着するので、その食料を進呈するからこれまでのように無料提供を続けてもらいたいとの申し入れがあつた。約束通り米国軍艦が横浜に入港すると、大量の食料を運んで来た。ありがたく受取り無料

サービスを続行したが、大きな矛盾を味わわないではいられなかったといっている。ホテルはあくまでも営利事業であり、「如何に食糧の寄贈を受けたとしても、一方において際限なく無料奉仕を続行していたのでは、やがて経営面において採算が合わなくなる」と考えたからである。犬丸は震災を総括して次のように述べていた。

落成開館披露の当日、しかも祝宴開始直前にかかる大災禍が発生するとは、如何なるめぐり合わせといふべきであろうか。すべては天なるかな、命なるかなである。しかし祝宴開始中、この地震が起こっていたならば、来賓の誘導にも大混雑を来たしたことであろう。それを考えれば、時刻の早かったことは、まだしもよかったといひ得る。もちろん、この惨事の突発で披露は自然中止となった。

しかし、この災厄は期せずして新館の建築の優秀性を天下に実証する結果をもたらしした。この建築は継ぎ目が随所にあり、地震に遭った時、全体がたわむように造られており、また重心が極度に低いところにおかれている。私は日本古来の建築である、五重塔、三重塔の類が地震や暴風によく耐えるという点で、その構造に、このホテルの新館と軌を一にする要素があることに、大きな興味を抱かずにはいられない。

渡辺好人(注40)は日比谷公園にいた。四日前に司法試験の受験を終えた渡辺は、日比谷公園の噴水池近くの四阿屋で本を読んでいた。「朝から蒸し暑い日であった。気味の悪い黒雲が空一面を覆っていた。」とその日の天候を記している。「そのときである！ 大地がグラグラと揺れた。池の水がパシャンパシャンと跳ね上がる。大地震だ！ 私は這うようにして大樹の幹につかまり、足を踏ん張って立っているのがやっとだった。眼の前の松本樓の三階建の木造家屋が轟音を立てて崩壊した。土煙りが上る——」と記されている。真つ先に心に浮かんたのは事務所のことであつたという。渡辺は法律事務所の事務員をしていた。まだしきりに襲ってくる余震の中を走り大通りに出た時、帝国ホテルのあたりからすでに黒煙が上

がっているのが見えた。その火を横目で見ながら事務所のある神田紺屋町目指して走り出した。事務所に辿り着くと、建物は無事だったが中には誰もいない。「日本橋から下谷、浅草方面と思われる一帯の空は、すでに濛々たる黒煙に覆われている」。いずれは事務所が焼けると思い椅子や机の類を運び出そうとしたが、まだしきりに余震が襲ってくる。やむなく貴重品や事件書類だけを持ち出した。それから、赤坂にある事務所の主である弁護士宅へ向かったが、家族一同みな無事であつた。事務所はその夜に丸焼けになった。

渡辺が最も心配したのは、試験の発表のことであつた。「もしかしたら、答案が焼けてしまったのではあるまいか。もしそうだったら、せつかくの努力も、せつかくの奮闘も、何もかも御破算だ」。心配のあまり司法省に問い合わせたところ、「そんなことはないが、この混乱で、発表はいつになるか、いまのところ全く予定もつかない」という返事であつた。

長岡隆一郎(注41)は霞が関にある内務省にいた。都市計画局長であつた長岡は、局長室で執務中であつた。「グラグラと来ると天井の電燈は落ちて来る。本箱は倒れる。危くて仕方がない。はふはふの体で内務省の前庭に逃げ出した。」と記している。その夜は、幹部が官邸の晩餐会に招待されていたという。「当時此震災の結果があれ程の大事に至ると思ひも依らず、前庭に集まつた連中は一体今晩の内相招宴はどうなるだらうかと呑気な噂をして居」た。そこへ、ある技師が逃げ遅れて足をくじいたという知らせがあつたので、局長用の自動車に乗せて四谷の病院に連れて行き手術してもらつたといっている。足をくじいただけで手術というのも大袈裟な気もするが、「往來で手術をして貰つた」といっているのは驚きである。その帰り道に白金にある自宅に帰った。長岡はそれを、「其儘内務省に帰ればよかつたものを」、また「之は実は一世一代の不覚であつた。」と後悔の念を込めて述べていた。家族一同は家の前の広場に避難してみな無事であつた。「其頃から火災が市中各所に起り、夜に入ると共に其状凄惨を極むるに至つた」。「内務省も焼けたと云ふ風評を何処からともなく聞いたが、暗くなつてからは危険で到底外出も出来ぬ。夜明けを待つて赤坂区の方を大廻りして漸く内相官邸に辿り着いたが、同僚は已に顔を揃へて居り、内相官邸の庭で臨時閣議が開か

れて居る」。ある人は家が焼け家族が行方不明なのに、そのことは口に出さず執務をしていた。「此位気まりの悪い思ひをした事は無い。」と記されていた。

閣議の結果、救護事務局が設けられ、長岡は情報部を受け持つこととなった。「当時新聞は全部休刊で、帝都の事情は罹災民に解らず人心恟々たる有様であったので、たつた一つ焼け残った四谷の満月堂と云ふ印刷屋と特約して、九月二日から震災彙報と云ふ新聞を発行して市民に無料で配布した。」と記している。続けて、「本物の新聞の全然無い時であるから此震災彙報は大受けに受けた。或尊き方は配達を待ちかねられ、受取りに使者を遣はされた事もあった。」と自賛しているが、「其代り随分ヨタを飛ばした」こともあったと正直に告白している。「商船アングス丸食糧を満載して品川沖に到着せり等と根も葉もない嘘ウソの号外を出して市中の電信柱に貼りつけ、此頃の支那の新聞記事のやうな法螺ホトケの宣伝をした事もあった。」というのだからひどいものである。しかし、「官界生活二十余年を通じて此時ほど緊張して働いた事はなく、「文字通り一回不眠不休で働いた。」といっている。また、「過労と睡眠不足と、胃に馴れぬ玄米の握り飯ばかり喰べて居た為に激しい下痢を起して発熱し、ぶつ倒れたが、氷もなく医薬品も乏しく、かかりつけに主治医は何処に居るか見当もつかない。それでも我慢に我慢を重ね、眠くなると官邸芝生に転た寝をしつつ一生懸命に働いた。」と記されている。

相馬愛蔵（注42）の自宅は平河町にあった。地震発生時に自宅にいたとは記されていないが、平河町の家に「移つてから五ヶ月目の九月一日であった。当時の惨状は今更こゝに語るまでもないが、人口三百万を擁した東京市は、僅かに山の手の一部を残して他は烏有に帰し、交通機関は盡く破壊停止し、多くの避難民は住むに家なく喰ふに食なき有様であった。」と記されている。相馬は新宿にパン屋を開いていたので、震災時はあるいは新宿にいたかもしれないが、いずれにしてもはつきりとはわからない。そのパン屋とは、現在も存在する中村屋である。

中村屋は幸運にもこの災難を免れたが、電気も瓦斯も水道も止つたのだから、パンも菓子も製造することが出来ない。しかし店頭には食なき人々が押寄せて、パンはないか菓子はなかと求める有様に、私は商人の義務としても手を束ね

てみられる時ではないと思ひ、手のかゝらぬ能率的なものと命じ、瓦斯も電気も水道も役に立たぬ中で、全員必死の働きを以つてつくり出したのが、今年々その日に記念販売をする所謂地震パン、地震饅頭、奉仕パンの三品であった。僅かにこの三品ではあつたが、これだけでも直ちに製造して間に合わせたのは中村屋だけで、従つて製品は、日本銀行の金庫を護る兵士達のおやつにもなれば、更に惨状の酷い横浜からもはるく買ひに来るといふ次第で、拵へても拵へても間に合わず、半日の製品が一時間の販売にも足りないといふ状況であつた。

パン製造はしばしば起こる余震のなか、昼夜兼行で行なわれたという。だが、二日ほどで原料の砂糖と小麦粉が底をついてしまった。そこで砂糖会社と製粉会社に交渉すると、問屋からの注文は絶え、地方への輸送も絶たれてしまったという。ここで、大いに歓迎され格安で売ってくれたという。「荷馬車数台に満載した砂糖と粉が店頭に着いた時は、『あゝこれで原料の不安が解消した』と、思はず全員飛出して万歳を叫んだ。この荷が手に入ったので私は店頭に張り出して、罹災者の方々は小麦粉を原価の四円で分けて上げることにし、製品のパンや菓子も従前よりは凡そ一割方安く売ることが出来て、罹災者を初め物資欠乏の中にある人々へ、我が中村屋がいくらかでも務めることが出来たと思ふと私は実に嬉しかった。」と記されている。

原田三夫（注43）は麹町にある『科学画報』の編集室にいた。『科学画報』は新光社から出されていた雑誌だが、原田は社員ではなかった。今でいえばフリーランスの編集者といったところだろうか。十月号の口絵写真の撮影と星図の原稿をもらいに東京天文台に行こうとしたが、朝から曇りがちの空が雨になってきたので見合わせることにした。やがて空は晴れてきたが行くのはやめ、編集作業に取りかかることにした。その時であつた。

小さな震動が感ぜられた。小さな震動はよくあるので気に止めなかったが、フトそれが上下動であることに気がついた。これはいけないぞと思うまもなく

激震となった。しかし向いに木造三階の旅館があつたので、それが道に仆れるかもしれない。二階でもあるし、むしろここにいたほうが安全だと思つたが、逃げだすばあいも考えて、階段が降りられるかどうかを見ようと降り口へ行こうとしたが、ドコンドコンと突き上る振動のため、足を踏んばるだけで歩くことができない。

激しい上下動が長く続いた。けたたましい響が、あちらこちらで起つた。外を見ると、向うの土蔵の瓦が土煙をあげて見る見るうちに落ちてしまう。ガラスの割れる音、瀬戸物の碎ける音、物の仆れる音、逃げだす人人の悲鳴、そういうものがゴツチャになって聞こえた。そのうちに大きな水平動が起つて、家は荒浪にもまれる船のように揺れだした。いよいよ家が仆れるのだなと思つた。世界の終りが来たのだなと思つた。

震動が少しおさまった時に外に出ようとしたが、素っ裸であることに気がつき、浴衣をひっかけて階段を降りた。原田は素っ裸で編集作業をしようとしたのである。「往來に出たときは、たいぶ収まっていたが、地面は波のように動き、逃げまどう人は酔漢のようによろめいた。襦袢と腰巻の女、浴衣だけで帯をしなない男が、あちらこちらで三三五五、はだして道路に立っていた。どの顔も青ざめ不安に充ちていた。」と記されている。原田はカメラを持ちだしあちこちの写真を撮つたといっている。おそらくは一度戻つて取ってきたのであろう。いわゆる動画を撮りたかつたのだが、「映画カメラ」は壊れていたという。「麹町通りに出ると、どの店もなかが滅茶苦茶になっていた。ときどき余震がやってきて、すべての家がゆらゆら揺れ、体は波に浮んでいるようで、その都度人人は恐怖の目を光らせ、若い女性は抱きあつてキヤーキヤー叫んだ。見る見るうちに往來は活気を帯び、わが家を心配する人をのせた自動車が全速力で走り、トラックもバスも人を満載していた。そのうちに嵐が起つて家屋の壊れた破片が、バラバラと空に捲きあげられ、じつに物すごい光景であつた。」と記されている。原田は鎌倉にいる妻のことが心配になり、ひとまず下宿に戻り支度をして鎌倉に向かつた。

三宅坂下の参謀本部前へ来ると、日比谷交叉点が赤々と燃え上つていた。もつと行くと警視庁の半分が火を吹いていて、濠端で群衆が見物していた。二重橋前へ来ると帝室林野局が、すでに焼け崩れていた。珠数つなぎの囚人が警視庁の留置所から引っぱり出されて来た。囚人は編笠をあげてあたりを見たが、誰かが「あつ沢正だ」といった。賭博で留置されていたのである。頭をつぶされて死んだらしい人が、手車で運ばれて行く。濠端へ行ってみると、警官がポンプを持ちだして火を焚いていた。消防夫が集まらぬのである。気象台へ行ってみる気になり、そのほうへ行くと、内務省がペシャンコになっていた。

先に見た、沢田正二郎や島田正吾の体験のいわば目撃談が語られている。なお、警官が「火を焚いていた」というのは、むしろ「火を消していた」の誤りであろう。気象台に行くと震源地などが揭示されており、震源は北北東と記されていた。詳細を聞こうとしたが、職員は忙しくそれどころではないということなので辞した。東京駅へ行く途中、ペシャンコになった内務省が燃え上がっているのを見た。東京駅に着くと、「本日運転不能」と大書してあつたので自動車で帰ろうと思つたが、自動車はあつても運転手がない。そこで、下宿の自転車を借りようと思ひ再び下宿に向かつた。「状況を見るため呉服橋を渡り外濠に沿つて数寄屋橋へ行くと、ガードの向うは、すでに焼けてしまつて何もなかった。山下橋を渡り日比谷公園をぬけて濠端に出ると、帝劇が燃える最中で黄色や緑がかつた白煙がもうもうと立ち上つていた。」と途中の様子が記されている。下宿に辿り着いたが自転車はなかつたので、バスに乗つて品川まで行きそこから歩いた。バスは無料だったが、鈴なりの人で転覆しそうであつた。大森から蒲田、東神奈川、保土ヶ谷を経て戸塚まで辿り着いた頃には夜が明けていたという。鎌倉に入ると多くの家が倒れたり焼けたりしていたが、自宅は壁が落ちただけで別条なく家族もみな無事であつた。夜になると「鮮人騒ぎ」がはじまつた。「どこそこの切通しから、鮮人の一隊が侵入して民家を掠奪し、警官に追われて山中に隠れたが、夜にまた襲来するだろう」という噂であつた。原田も懐中電灯で家の周りを警戒したといっている。

翌日、壁の落ちた家に入り掃除をしたが、警戒のため夜になってもろうそくをつけることはできなかった。何事も起こらぬよう念じつつじつと夜が明けるのを待った。そして、ようやく薄明かりが差してきた。「水のように澄んだ空に二十日余りの月が天頂にある。冷たい風が、いかにも秋の朝らしかった。遠近で鶏が鳴きコウロギ、鈴虫などが盛んに草むらですだき、池では蛙の声も聞こえ、山ではツクツクホウシが鳴いた。見る見る空がぶどう色に染まり、山の近くにはライラック色やバラ色の雲があった。」と待ちわびた夜明けの様子が抒情的に記されている。三日目に半鐘が鳴った。「鮮人が来たのか」と思い火の見梯子へ駆けつけると、興奮した若者が「貴様は鮮人だろう」といった。後ろに回していた手が動こうとした時、知り合いの人が「原田の旦那じゃないか」と声をかけてきたのでことなきを得たが、若者は手斧を隠し持っていたという。「じつはこの騒ぎは、長谷で数人の乞食が商店に物乞いをしたのが、誤伝され、流言蜚語となったのであった。」と最後に記されている。

騒ぎがおさまると、食料と薬剤の欠乏に悩まされた。結核を患っていた妻だけには白米を食べさせようと思い買い出しに奔走し、潰れた薬店をあさり薬品を探したりした。また、フィルムも手に入れ地震の科学写真を撮り歩いたともいっている。役場の前では炊出しを待つ大勢の人がザルやバケツを持って並んでいた。警察の前には被害状況の掲示が貼り出され、東京の下町は全滅とのことであった。海岸の方へも足を向けた。「材木座の海岸へ行くと津浪のために立っている家は一軒もなく、押上げられた漁船につぶされた家もあった。段段と打ちよせる波は人間の無力を笑うように思われた。」と記されている。

九月七日、気になっていた東京の下宿と新光社の様子を見るため、特務船「関東」に乗り込んだ。途中、「見舞に來た美しい銀色の米艦が、あとから来て追い越した。」「両艦の甲板のあいだで拍手が交わされた。私は国民と国民のあいだの美しい友情の現われに、心が端然として寒気を催し」と記している。無事芝浦に着いたが、予定が遅れ準備ができていなかったため艦内で一夜を明かした。翌朝、駆逐艦とボートで棧橋に上がった。「護岸堤には裸体の屍体（あとで鮮人と知った）が累々と引っかかっている、腥^{ニク}な破滅の東京の一端が現れていた。」と記されている。

新光社は焼け、「焼跡にはフランスの雑誌の燃え残りと盃が一つあるだけであった。」と記されているが、下宿へ行ったことは記されておらず、その日に無蓋車に乗って鎌倉に帰ったといっている。だが二、三日後、新光社の仲間から連絡があり、再び東京に向かった。その仲間の家を編集所にして直ちに『科学画報』大震災号を編集し、九月十五日付で発行したという。

大妻コタカ（注⁴）は三番町にある大妻技芸学校にいた。大妻は経営者兼校長であった。二期期の始業式の日で土曜日でもあったので、生徒はほとんど下校した後、掃除当番の生徒と職員が居残っているだけであった。「まさにお弁当を開こうとしたその瞬間、正確には午前十一時五十八分、突然激しい轟音と共に驚くべき激震が引続いて起ったのです。狼狽した生徒や職員が急いで校舎外に逃れようとしたその時、校舎に隣接している高さ四メートルの石垣がくずれ落ち、先にとび出した生徒九人があつという間もなく深い土の中に埋まってしまったのです。」と記している。続けて、「早速職員や小使いさん達で掘り出し作業にとりかかりましたが、何しろシャベルや鍬の数も少なく、懸命の努力も容易に目的を達する事が出来ません。近衛聯隊に兵士十余名の来援をお願いして、三十分の後ようやく全員を掘り出すことが出来ました。」と記されている。六人は無事だったが、一人が負傷、二人は絶望的であった。三人を戸板に載せて病院に運んだが、不幸にして二人の生徒が命を落としたという。やがて運び込んだ病院も火事で危なくなってきたので、負傷者を別の病院に移し、二人の遺体を近くの公園に運んだ。校舎の方も火が迫ってきたので、生徒達を引率し公園と靖国神社広場の二手に分かれて避難した。「その夜は全員火の粉の散る露天に身をゆだねながら不安の一夜を過しました。飢えと恐怖におののきながらあの夜の何と長く感じられたことでしょう。」と記している。午後八時頃、折からの強風にあおられ校舎が火のみ込まれた。校舎は八月末に新築したばかりであった。「ゴーツとうなるような火焰の中にのみこまれてゆく時、私は五番町の公園から唯々茫然と見送る以外にどうすることも出来なかったのです。」と記されている。夜が明けると辺り一面は焼け野原であった。

二日の夕方三時頃、一人の先生が自宅からおにぎりを持ってきてくれ、一日半

ぶりに食べ物にありついていた。「涙の出る思いでみんなで一個ずつ分ちあっていたのだいのでした。」と記している。二人の生徒の遺体はその日に自宅に届け、残りの生徒は山階宮邸の庭に避難させることができた。飛行機用の天幕や毛布なども貸してもらい、生徒達はようやく身を横たえることができた。その夜はそこで過ごしたが、全員で二百九十七名という大人数であった。それから二日経ち、三日経つうちに遠方から来ていた寄宿生は親や兄弟が迎えに来た。また市内の者は送り届け、人数も大分減ってきたという。茨城県取手市から来た寄宿生の父親がいたので食料の提供をお願いしたところ、二日後の五日に、「米俵五俵と野菜類、更になべ、かま、茶わん、はし、おしゃもじ、歯ブラシ、石けん、その他数々の日用品」を馬車に積んで運んで来てくれた。その「御親切は、いまだに忘れる事の出来ない感謝でございます。」と記されている。その後、東京には様々な救援物資が集まり人々に配られたが、学校には物資は配られなかったという。何度も頼みに行き懇願したが、「私立学校はあくまでも校長が職員や生徒の生活をみる義務がある」といつて一向に取り合ってくれなかったという。しかも、配給場所は何の断りもなく学校の校庭で行われた。「くやくしくやくしく涙が出るのをじつと我まんしながら、私達職員は交代で千葉や埼玉等近県へ買出しに行きました。」と記されている。

一方、何とか授業を再開しようと、被災を免れた学校に校舎の一部提供をお願いして回った。その結果、「昼間の技芸学校の生徒は小石川の淑徳女学校に、高等女学校の生徒は渋谷の実践女学校に、夜間部の生徒は当時市ヶ谷の女子商業学校（嘉悦学園）に、それぞれ御同情を得て校舎を拝借することを得、同年九月十五日には第一回の生徒召集が出来るまでこぎつけたのでした。」と記している。縁故を頼って福島県まで直接木材を買いに行き、日夜復旧につとめた結果、十二月一日には仮校舎と事務所ができた。それで実践女学校と女子商業学校の教場を本校に移すことができたといっている。

最後に、本稿でも取り上げた吉岡弥生について触れているところがあるので見ておきたい。

同じ時、現在の東京女子医大も、故吉岡弥生先生のお話を伺うと、出来たばかりのま新しい校舎や病室を失われ、着ていた洋服と聴診器の入った鞆だけでようやく逃げのびられたそうで、先生はその上、その直前に夫君の荒太先生が御他界になったばかりで、重なる試練にどんなにか心細く大変なことだったろうと御同情申し上げながらも、あの窮地を脱して、周知のような立派な学園を再建なさったその勇氣と御努力に自ずと頭のさがる思いがいたします。

注

- (1) 土方梅子『土方梅子自伝』（早川書房 一九七六）
- (2) 徳川幹子『わたしはロビンソン・クルーソー』（茨城県婦人会館 一九八四）
- (3) 仁田勇『流れの中に一科学者の回想』（東京化学同人 一九七三）
- (4) 安倍能成『我が生ひ立ち』（岩波書店 一九六六）
- (5) 長谷川仁『へそ人生 画廊一代記』（読売新聞社 一九七四）
- (6) 南部麒次郎『或る兵器發明家の一生』（天龍出版社 一九五三）
- (7) 広津和郎『年月のあしおと』（講談社 一九六三）
- (8) 近藤憲二『一無政府主義者の回想』（平凡社 一九六五）
- (9) 古今亭志ん生『びんぼう自慢』（立風書房 一九八一）
- (10) 森岩雄『大正・雑司ヶ谷』（青蛙房 一九七八）
- (11) 佐佐木信綱『作歌八十二年』（毎日新聞社 一九五九）
- (12) 三宅周太郎『観劇半世紀』（和敬書店 一九四八）
- (13) 吉岡弥生『吉岡弥生伝』（同書伝記刊行会 一九六七）
- (14) 村上一郎『振りさけ見れば』（而立書房 一九七五）
- (15) 喜多六平太『六平太芸談』（春秋社 一九四二）
- (16) 小林勇『一本の道』（岩波書店 一九七五）
- (17) 正木直彦『回顧七十年』（学校美術協会出版部 一九三七）
- (18) 栗田確也『私の人生』（栗田書店 一九六八）

- (19) 金子佐一郎『組織人のこころ 私の歩んだ七十七年』（中央経済社 一九七六）
- (20) 井口基成『わがピアノノ人生 音楽回想』(芸術現代社 一九七七)
- (21) 木村守江『突進半生記』（彩光社 一九八一）
- (22) 曾我祐準『曾我祐準翁自叙伝』（同書刊行会 一九三〇）
- (23) 岡田実『閃光 第1部・第2部』（産報 一九六九、七〇）
- (24) 田辺尚雄『明治音楽物語』（青蛙房 一九六五）
- (25) 石山堅吉『雑誌経営五十年』（ダイヤモンド社 一九六三）
- (26) 谷村貞治『この道ひとすじに 運・鈍・根の人生』（大和書房 一九六六）
- (27) 江原通子『瓔珞をはずすとき』（柏樹社 一九七九）
- (28) 青木一男『聖山随想』（日本経済新聞社 一九五九）
- (29) 青木得三『おもいで 青木得三自叙伝』（大蔵財務協会 一九六六）
- (30) 村松道彌『おんぶまんだら 音楽・舞踊・楽器ジャーナリストの回想』（芸術現代社 一九七九）
- (31) 内田信也『風雪五十年』（実業之日本社 一九五二）
- (32) 沢田正二郎『苦闘の跡』（新新社 一九二四）
- (33) 島田正吾『ふり蛙』（青蛙房 一九七九）
- (34) 正力松太郎『悪戦苦闘』（早川書房 一九五二）
- (35) 石井桂『建築家の歩いた道』（室町書房 一九五四）
- (36) 小野賢一郎『明治・大正・昭和 記者生活二十年の記録』（私家版 一九二九）
- (37) 鈴木茂三郎『ある社会主義者の半生』（文藝春秋新社 一九五八）
- (38) 青木均一『私の処世・私の経営』（実業之日本社 一九六〇）
- (39) 犬丸徹三『ホテルと共に七十年』（展望社 一九六四）
- (40) 渡辺好人『我一人我が道を行く』（法曹公論社 一九七三）
- (41) 長岡隆一郎『官僚二十五年』（中央公論社 一九三九）
- (42) 相馬愛蔵『一商人として』（岩波書店 一九三八）
- (43) 原田三夫『思い出の七十年』（誠文堂新光社 一九六六）
- (44) 大妻コタカ『こもくめし』（大妻学院 一九六一）

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費（挑戦的萌芽研究 課題番号 一三六五二〇四八）の助成を受けた。